

特攻平和観音像 (陸・海軍二体)



世田谷山観音時・特攻観音堂

報 特 攻
平成25年11月
第62回特攻平和観音年次法要

第97号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1靖国神社遊就館内・地階
電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能
発行人 羽淵徹也
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

第62回特攻平和観音年次法要 …… 1
特攻平和観音と世田谷山観音寺 …… 7
伊勢神宮第62回式年遷宮 …… 12
特集・特攻インタビュー(第10回)
海軍航空特攻 岡本 鐵郎氏
田中 三郎氏 …… 16
司会 及川 昌彦
倉形 寛

「幻の桜花四三二型ターボジェット特攻機(後編)―兵器システムの全容と作戦運用構想を探る―」… 29
特攻コラム(その三) …… 34
「NHKクロースアップ現代」番組を観て …… 36
沖縄航空作戦関係資料 …… 37
「十一分隊」ラッパ隊について …… 38
事務局からの報告等 …… 39

日時 平成25年9月23日(月)
秋分の日 14時～15時20分
場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂
参列者 御遺族30名、御来賓・会員等

式次第
約180名、他に当日受付の一般参列者50数名、合計約260名

梵鐘点打 三回
式衆入堂 世田谷山観音寺山主他
駒撃神社宮司

国歌斉唱 トランペット 堀田 和夫
山主願文 特攻平和観音経 太田 賢照
世田谷山観音寺山主 澤田 浩治

神 儀 駒撃神社宮司 澤田 浩治
修祓の儀・降神の儀・献饌の儀
祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀
祭文奏上 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

献 歌 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
献 吟 一誠流 石橋 一歌
挨 拶 世田谷区長 保坂 展人
理 事 長 杉山 蕃
龍笛 逢坂 龍信

男性合唱団 玉串奉奠 顕彰会理事長ほか
指揮 大穂 孝子 焼 香 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
トランペット 堀田 和夫 世田谷区長 保坂 展人
「我が戦友よ」「加藤隼戦闘隊」 御遺族・御来賓各位
「若鷺の歌」

献 吟 吟 石橋 一歌
誠第17飛行隊隊長 伊舎堂用久
昭和二十年三月二十六日
那覇南西洋上で戦死
指折りつ待ちに待ちたる機ぞ来る
千尋の海に散るぞ楽しき
回天 多門隊 成瀬 謙治
昭和二十年八月十一日
沖縄海域で戦死
今ぞ男々しく南海に散らん



本堂回廊に展示の特攻絵画



故 吉田 茂元総理書「世界平和の礎」

会員・一般各位

式衆退堂

池前祭 山主 読経、神官 修祓・

祝詞奏上後、式衆退場

直 会 15時30分～16時30分

第62回特攻平和観音年次法要

平成25年9月23日(月) 秋分の日、世田谷山観音寺特攻観音堂において、第62回特攻平和観音年次法要が厳かに、盛大に斎行された。

今年是全国各地で異常な猛暑日、前例のない集中豪雨や強風・竜巻と、異常気象が続いたが、さすがに彼岸を迎えてこの日は猛暑も一段落し、秋冷とまではいかないまでも、爽やかな秋空となり、年に一度の年次法要が無事齋行できたのは何よりであった。正に、英霊の御加護と言うべきであろう。

ところで、今年には伊勢神宮の第62回式年遷宮の年である(遷御祭)の儀は、内宮が10月2日に、外宮は10月5日に斎行される。20年に1度の式年遷宮とは比ぶべくもないとはいえ、本年次法要も第62回を迎えたことは、何かしら因縁深いものを覚える。更にまた、出雲大社では今年、60年に1度の遷宮祭を、熱田神宮では、御創建1900年祭を迎えられた。誠に神の年とも言

われる節目の年に当たると。古来我が民族の伝統である「常若」の精神に則り、日本の、そして世界の、新生の年となることを祈念したい。しかもその上、この9月8日には、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定した。東京が世界を変える絶好の機会である。同時に、英霊が身を賭して護られた美しい国、日本を取り戻し、誇りある国、豊かで強い国、日本へと再生すべき時である。

それにつけて想起されるのは、吉田満著『戦艦大和の最後』の中で、第二艦隊の出撃に当たって、天号作戦の成否を巡り、大和乗組士官の間に激しい論戦が続き、痛烈なる必敗論が圧倒的な中で、哨戒長白淵大尉(二次室長、ケツブガン)が、薄暮の洋上に眼鏡を向けたまま、低く囁くように「進歩ナイ者ハ決シテ勝タナイ 負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ 日本ハ進歩トイウコトヲ軽シ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワツテ、本当ノ進歩ヲ忘レテイタ 敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ハレルカ 今日覚メズシテ日本ガ救ハレルカ 今日覚メズシテイツ救ハレルカ 俺タチハソノ先導ニナルノダ 日本ノ新生ニサキガケテ散ル マサ二本望ヂヤナイカ」と、その持論を以て、連日ガンルームに沸

騰した死生談議を制したとの一節である。青年士官達の、死を前にしての煩悶、苦悩に対し、明快な悟りを与えた言葉が、「日本ノ新生ニサキガケテ散ル」の一言であり、英霊たちは、未来の日本、新生日本を夢見つつ身命を擲たれたということである。

なお、大東亜戦争の意義とその成果及び神風特別攻撃隊の史実とその戦果については、当顕彰会会報『特攻』第93号「新刊図書紹介」欄にも掲載したが、吉本貞昭著『世界が語る大東亜戦争と東京裁判』及び同『世界が語る神風特別攻撃隊』(いずれも株ハート出版発行)に詳しいので、ご一読をお薦めしたい。著者の本名は中川 聖氏、

終戦時、市ヶ谷台上で割腹自決した第一総軍付き吉本貞一陸軍大将の親族に当たり、北海道・旭川大学地域研究所の特別研究員で、当顕彰会会員でもある。

今年も年次法要は、世田谷山観音寺山主太田賢照僧正と地元の氏神・駒繫神社澤田浩治司の共斎による神仏習合で行われた。太田賢照山主の提唱により始められた神仏習合による法要も既に6回目となり、すっかり定着した感がある。神仏習合については、既に何度か紹介した(注1)が、神と仏を同様に崇拝するという日本人の持つ優れた融和の精神の表れである。既に世

既に世

界平和運動の一環として進められてい
るが、現在の世界の情勢の中で、イス

ラム教徒の国々とキリスト教徒の国々
の対立、またその中でそれぞれの宗

派の対立が、世界平和の大きな脅威と
なっている。このような時にこそ、融

和、ないし大和の精神、和を尊ぶ心を
もってお互いを尊重することが、その

祭 文

本日ここ世田谷山観音寺において
御来賓の皆様、御臨席と御遺族、戦友
の皆様、御出席を頂き、第62回特攻平
和観音年次法要を斎行するに当たり、
謹んで在天の御英霊に申し上げます。

戦いが終わり、既に68年余の歲月
が流れました。昨年は、本顕彰会の
大黒柱でありました、山本卓貞前会
長、菅原道熙前副会長の御逝去を報
告致しましたが、御逝去から一年半、
後に続く私どもは、微力ながら公益
法人として、皆様の慰霊・顕彰に、
着実に努力致しておりますことを、
まず御報告申し上げます。

ここ一年、我が国の政治体制には
大きな変化がありました。昨年12月
の衆議院議員選挙、本年7月の参議
院議員選挙を通じ、自民党による安
倍政権が実現致しました。長期のデ
フレに悩んだ我が国経済も、回復の
兆しが見えてきました。東日本大震
災の後遺症がまだ癒えぬ等、ともす
れば不本意な出来事が多い中、明る
い未来への息吹を大切に致したいと

考えるものであります。さらに、今月
に入って、素晴らしいニュースが飛び
込んでまいりました。2020年オリ
ンピック・パラリンピック東京開催の
決定であります。前回の東京オリ
ンピックは1964年、戦後の復興を世
界に印象付け、新幹線、高速道路網、
都心のスポーツ施設整備等、現在の社
会構造の骨格を整備し、その後の国家
繁栄の大きな踏切り台となりました。
今回も、「おもてなし」の心を始めと
する、新しい高い理念の下、次なる飛
躍の原点にしなればならないと存じ
ます。他方、政治・外交の分野では、
戦後の復興を成し遂げた世代の高齡
化、少数化とともに、大変な難局を迎
えつつあります。北方四島、竹島、尖
閣諸島の領土問題は、国民の大多数が
考えている方向とは違う、腰の定まら
ぬ対応が続いております。我が国の対
応は、国際常識から見れば、「異常に
弱腰の国」とさげすまれることの影響
を恐れるべきであります。68年前、
英霊の皆様が、将来の日本強くあるべ
し、と考え、全てを捧げられた御心境
を付度すれば、申し訳ない事態と言っ

べきでありましょう。しかし、別の観
点から見れば、理不尽な行動は、決し
て長続きできるものではなく、年月と
人類の英知の前には、浄化されていく
宿命を持つております。ここ10年、オ
リンピック・パラリンピック開催を契
機に、我が国が誠意と努力に徹すれば、
世界中の信頼を得、自ら環境も好転す
ることが期待されるところでありま
す。在天の皆様、御加護を切にお願
い申し上げます。

慰霊行事は、亡くなられた人々への
哀悼の誠を捧げるものであることは当
然であります。更に重要なことは、
神と成り、仏と成られた皆様に、この
現世の有様を満足して見て頂けるか否
かを、高い次元から推し量り、現世に
生きる者が、自戒・自励の原点に立つ
ところに、その本姿を求めべきなの
であります。このような観点から見た
場合、20歳前後で散つて逝かれた皆様
が、夢に描かれたであろう誇り高く、
香り高く、諸国民に感動を与え得る社
稷・国家を目指して、我々は一層の努
力と精進に励まなくてはなりません。
ここに参集した私どもは、皆様の万感

の念に想いを馳せ、少しでも誇れる
社会の回復を目指して微力を尽くす
所存であります。かような観点から、
この度の東京オリンピック・パラリ
ンピック開催決定は、喜ばしいと共
に、将来を見越した更なる発展への
基盤作りの開始点と捉える必要があ
ります。

時の流れは非情にして、皆様を弔
い誠意を尽くして来られた御遺族、
戦友、同輩の方々も、年と共にその
数を減らしてまいりました。しかし、
皆様の尊い犠牲をテーマにした百田
尚樹の著作『永遠の0』が空前のヒッ
ト作となりましたように、まだまだ
この社会には、皆様を悼む心が健在
致しております。続く世代の私ども
も、英霊の皆様方の尊い犠牲と、皆
様が夢に描かれた美しい社会像、
国家像に今一度思いを致し、民意振
作に努めることをお誓いし、祭文と
致します。

平成25年9月23日
公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長 杉山 蕃

御挨拶

第62回「特攻平和観音年次法要」の開催に当たり、ご挨拶申し上げます。

今年も酷暑と呼ばれるぐらい暑い夏でした。また、台風による水害や日本には珍しい竜巻等、穏やかでない天候が続きましたが、本日は、爽やかな秋空の下で、年次法要に集うことが出来たことをお慶び申し上げます。

先の大戦で、短い青春の入口で尊い生命を賭して亡くなられた方々に、心からの哀悼の誠を捧げます。故郷を思い、親兄弟を案じ、そして国のためにと、短い生涯を閉じて逝かれた皆様を、私たちは決して忘れたいことはありません。青雲の志半ば

で、歯を食いしばり、愛する人たちのために消えていかれたその姿に、私たちは向き合います。残されたご家族、ご親族の皆様や戦場で苦楽を共にされた旧友の皆様のご心痛はいかばかりかと察するに余りがあります。戦後日本の復興と繁栄は、青春の途上で尊い犠牲となられた方々によって築かれてきたと、改めて感じます。

この夏、かつての戦争を追憶し、また特攻隊員として出撃する予定だった方々のお話が、幾つかのテレビ番組で放送されておりました。90歳を過ぎた方々が昨日のことのように語られる体験談は、胸に突き刺さるように響いてきます。同時に、私は「語り継ぐ」ということの重みを感じています。こう

は、戦後独学で絵画を勉強し、戦没者慰霊のため、数十点の油絵を制作された。それらの絵画は、靖國神社の参道や特攻平和観音年次法要などで展示され、多くの人々の感銘と賞賛を受けていたが、平成14年3月31日に松本画伯が逝去されたことなどにより、展示が取り止めとなっていたものであるが、特攻隊戦没者の慰霊顕彰と、併せて松本画伯の御遺志を継ぐため、今後とも展示を続けたいものである。

して、当事者として体験されたお話を直接聞く機会は、次第に限られた時間となっております。直体験のない世代の私たちが、心を開いてお話をよく聞いて、次の世代に伝えることの役割を強く自覚していこうと考えています。

戦後に生まれた私は、高度経済成長と共に成長しました。そのエポックが1964年(昭和39年)の東京オリンピックでした。そして、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定いたしました。これからの東京も、世田谷も、7年後に向けて、大きな変化が待っていることでしょう。

世田谷区は、恒久平和を目指して「平和都市宣言」をいたしました。戦争体験者の方々のお話を、次の世代の子供

法要準備作業が、着々と進められている中、昼前に、近くの駒繫神社(注2)に参詣することにした。一昨年の台風で境内入口の大木が倒れ、正面の坂道が通行止めとなっていたところは、立派に修復されていたが、今度は、境内奥にあつた「駒繫の松」(三代目)の大木がすっかり松食い虫にやられて枯死したため、残念ながら根本から伐採されていた。現在、四代目の若木を生育中とのことであった。我が国、我が民族の平和と

たちに伝えていく努力を一層積み上げたいと思います。

特攻平和観音年次法要の開催にご尽力されている特攻隊戦没者慰霊顕彰会の皆様を始め、関係者の皆様の長年にわたるご尽力に改めて心からの敬意を表させていただきます。

ご列席の皆様が末永くお元気で、貴重な体験をお子さんからお孫さんそして後に続く世代へとお話しいただけることを期待しております。

結びに当たり、地球上すべての人々が平和で健康に生きることが出来るように、世界の恒久平和を祈ります。

昭和25年9月23日

世田谷区長 保坂 展人

解決策の一助になるのではないかと。松や樺、楓や桜などの大木が茂り、

普段は静寂に包まれている世田谷山観音寺境内も、この日は午前中の早い時間から会員有志や奉仕の方々による受付準備、祭壇設営、特攻絵画展示等の作業で賑わっていた。

絵画展示は昨年から、中江仁評議員の指導の下、復活展示することとなった。絵画は、陸士61期生の故松本武仁画伯の筆になるものである。松本画伯

は、戦後独学で絵画を勉強し、戦没者慰霊のため、数十点の油絵を制作された。それらの絵画は、靖國神社の参道

や特攻平和観音年次法要などで展示され、多くの人々の感銘と賞賛を受けていたが、平成14年3月31日に松本画伯が逝去されたことなどにより、展示が取り止めとなっていたものであるが、

特攻隊戦没者の慰霊顕彰と、併せて松本画伯の御遺志を継ぐため、今後とも展示を続けたいものである。

法要準備作業が、着々と進められている中、昼前に、近くの駒繫神社(注2)に参詣することにした。一昨年の台風で

境内入口の大木が倒れ、正面の坂道が通行止めとなっていたところは、立派に修復されていたが、今度は、境内奥にあつた「駒繫の松」(三代目)の大木がすっかり松食い虫にやられて枯死したため、

残念ながら根本から伐採されていた。現在、四代目の若木を生育中とのことであった。我が国、我が民族の平和と

繁栄を祈願するとともに、四代目の若木の成長を祈念して、帰山した。

特攻観音堂前には沢山の美しい季節の花を盛った供花が並べられ、お堂の向かって左側にある故吉田茂元総理大臣の筆になる「世界平和の礎」の碑が一段と重厚さを加え、特攻勇士たちの偉業を想起させられた。英霊の方々が身を捨てて守ろうとしたこの国、この

民族、引いてはアジア諸国の独立と平和。正にその尊い礎となられたのであ



梵鐘点打



祭文奏上・杉山蕃理長



御挨拶・保坂展人世田谷区長

る。ビルマ（現ミャンマー）の初代首相バー・モウ氏も「特攻隊は、世界の戦史に見られない愛国心の発露であった。今後数千年の長期にわたって語り継がれるに違いない。」「カミカゼの精神、それは新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も打ち破ることのできない自己犠牲の精神、勝利のために死をいとわない精神である。」「神風の精神が減びない限り東アジアも決して滅びない」と述べている。誠に、特攻精神こそ、我が国のみならず、東アジアの、そして、世界の「平和の礎」なのである。

で年次法要は始まった。打者航空自衛隊倉形寛空曹長、補助者同上田中俊彦3等空曹の心を籠めた打鐘の音は爛々として森に飴し、参列者の心を洗う。山主、神官ら特攻観音堂に入堂し、及川昌彦評議員の司会により肅々と法要は進められた。

参列者一同起立し、元海上自衛隊東京音楽隊隊員堀田和夫氏のトラベット伴奏により国歌斉唱。続いて堂内では、祭主世田谷山観音寺太田賢照山主による願文奏上が行われたが、太田山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、

大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。

真に特攻勇士は、護国の鬼神となつて散華され、今や平和守護の観世音菩薩となつて我ら衆生を見守つておられるのである。

代わつて、駒繫神社（注3）の澤田浩治宮司祭主となつて神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れの中、清らかに齋行された。玉串奉奠の儀は、先ず太田山主に始まり、当慰霊顕彰会と御遺族の各代表によつて行われた。

次いで、堂前において、当慰霊顕彰会杉山蕃理事長による祭文奏上が行われた（祭文は別掲）が、その中で、特に、安倍内閣の出現により、我が国経済の未来に対する曙光が見えてきたことと、2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催決定により、これを機に新しい高い理念の下、次なる飛躍の原点とすべきであり、国の政治・外交、安全保障、領土問題等についても、確たる理念の下に、これを推進し、英霊の御期待に応えなければならぬと強調された。

続いて御来賓の保坂展人世田谷区長が挨拶に立たれ、別掲のように述べられて、英霊の御意志を受け継ぎ、恒久平和と福祉のために尽力することを誓われた。

次いで、一誠流・石橋一歌氏の吟、



献吟・吟 石橋一歌・笛 逢坂龍信両氏

逢坂龍信氏の龍笛により、特攻戦没者の遺詠二首が朗々と献詠された。

続いて、昨年に引き続き、当慰霊顕彰会会員有志十数名の男性合唱団（指揮・大穂孝子女士）が、堀田和夫氏のトランペット伴奏により、献歌「我が戦友よ」（大穂園井女士の解説付き。歌詞と楽譜は別掲）、「加藤隼戦闘隊」、「若鷲の歌」の三曲を見事に歌い上げた。英霊たちもさぞ、御霊安らかに唱和されたものと拝察する。献歌の締め括りは、堀田氏のトランペット吹奏に合わせ、全員で「海ゆかば」を斉唱した。

次いで、当会代表・御来賓・御遺族を始め参列者一同祭壇前に進んで順次



献歌・男性合唱団（指揮・大穂孝子氏）

焼香を行った後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う「観世音菩薩・夢違い観音像」（注4）に向かつて朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があった。滞りなく年次法要の幕を閉じた。

引き続き、15時30分から境内で直会が行われたが、初めに、福岡県偕行会会長菅原道之氏の発声により、御英霊に対し献杯を行った後、各テントに参列者相寄り、約1時間、和やかに杯を交わして歓談した後、それぞれ来年の再会を約して解散した。誠に身も心も清められ、温められた一日であった。

（飯田正能記）



法要会場・御遺族、来賓席

（注1）神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号（2頁）に掲載したように、平成21年6月11日、高野山真言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名151社寺でつくる「神仏霊場会」（会長＝森本公誠・東大寺長老）の主催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が盛大に齋行されて以来、定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことになったとのことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起る以前は盛んであった、神仏を一緒に崇拜する精神風土を取り戻そうと、

平成20年3月に設立され、世界平和運動の一環として、この運動を進めたいとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。

（注2）「駒繫神社」は世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目鎮座まします古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は大国主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であるとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂れは、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たって武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繫いだという故事に由来する（詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号4頁以下参照）。

（注3）世田谷山観音寺境内の蓮池の中に立ち給う「観世音菩薩立像」は、法隆寺夢殿の「夢違い観音像」を模して拡大鑄造された菩薩像で、その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている特攻勇士の霊壘簿の写しが納められている。夢違い観音とは、悪い夢（二度と経験したくないこと、思い出したいくないことなど）を良い夢に変えて下さる観音様と信仰されている。



池前祭・読経



焼香・御遺族

我が戦友よ

一 国に捧げて 集いし我ら
今宵一夜を 思い出に

君は雄々しく 南海の
碧い波間に 消えていった

あーあー 我が戦友よ
貴様と俺との 学び舎に

今も青春 あるものを
白いマフラが 好きだと言った
つぶら瞳よ さよならと

君は微笑み 大空の
虹の彼方に 消えていった

あーあー 我が戦友よ
貴様と俺とで 見た雲は

今も臉に あるものを

三 花も二十歳の 蕾のままに
散るは覚悟と言いながら

君は淋しく 名も知らぬ
遠い孤島で 散っていった

あーあー 我が戦友よ
貴様と俺との 故郷に

今もつばめが 来るものを

〔注・この歌は、昭和48年秋、学徒
出陣10周年記念の五科連合（第14期
飛行予備学生・第4期長科予備学生・
第1期飛行予備生徒・第11期主計科
法務見習尉官）の会合で、戦没同期
生のために創られたものである。〕

特攻平和観音と世田谷山観音寺

〔編注・本稿は、平成18年5月に作成された「特攻平和観音と世田谷山観音寺」と題する小冊子（財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会・特攻平和観音奉賛会作成）であるが、世田谷山観音寺の創建と特攻平和観音像奉安の経緯について纏められた貴重な資料であるから、年次法要の参考資料として、再度掲載する。〕

はじめに

法隆寺夢殿におわします、「夢違い観音像」を模して鑄造された特攻平和観音像が、世田谷山観音寺に奉安されて、昭和28年に特攻平和観音奉賛会が設立されたが、当時、会の発足に尽力された第一世代の方々は既に悉く亡くなられた。第二世代の方は、奉賛会と同根二体の特攻慰霊顕彰会を起ち上げて、春の靖國神社での陸海軍特攻隊合同慰霊祭を行うようにし、更に現在の財団法人化を図った。その第二世代の中心をなした方々も多くは鬼籍に入られている。

現在は、終戦時最若輩層であった者が第三世代として会の運営の中心に

Moderato
我が戦友よ
(1) くににささげて つどいしわれら
(2) はなまはたりの つばみのまへに
あーあー 我が戦友よ
貴様と俺とで 見た雲は
今も臉に あるものを
あーあー 我が戦友よ
貴様と俺との 故郷に
今もつばめが 来るものを

なっているが、既に傘寿が手に届く年齢となつて、後何年かのうちに、次世代の方々に会の運営を委ねざるを得ない時を迎えている。

今や、特攻平和観音奉賛会の草創期について詳しい方は、先代睦賢和尚に従い、事に当たつて来られた現住職の太田賢照和尚のみになつてしまった。

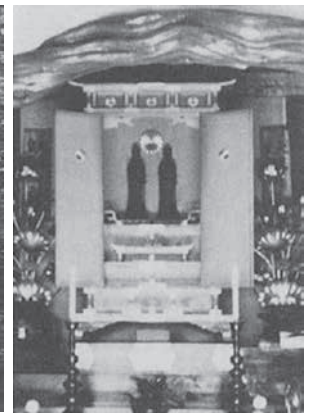
特攻平和観音創成の歴史を埋もれさせることなく、次世代、次々世代の方々に継承しなければならぬと痛感し、平成15年から16年にかけて、何回かに亘り、賢照和尚の話を拝承して纏めたものを会誌59号に掲載した。

今回その資料化を図つた。特攻平和観音の由来、観音像と世田谷山観音寺とが見えざる糸で繋がつていたと思わざるを得ない歴史が、後世に確実に伝承されて行くことを念じて止まない。

一 特攻平和観音

イ 事の始まり

日光山輪王寺華藏院(天台宗)の住職関口真大師(大正大学教授)と及川古志郎元海軍大将(昭和20年5月28日まで、海軍軍令部総長)は、戦後間もなく、関口師とその友人である、真言宗と浄土宗の僧侶と想い図つて、特攻烈士の御霊を弔うべく、平和観音会を設立した。



会を象徴する観音像としては、法隆寺金堂にまします、夢違い観音像が最も相応しいと考え、当時の法隆寺の佐伯貫主に願ひ出て、縮小摸写することを許された。一〇八体の鑄造を、当時、神戸高専の古宇田 実教授に依頼し、希望者に一体5万円で頒布することになった。

法隆寺の御本尊には光背が付いていないが、平和観音会が鑄造した像には光背を付けて、戦没者名等を遺族が記入出来るように配慮された。因みに現在、特攻観音堂前の池中に立つ夢違い観音像には後背は付いていない。

及川元大将は、熱心な在家の仏教徒で、関口師と親交があったという。賢照師が直接関口師から聞いたところによると、及川元大将に頼まれて、出撃前の特攻勇士に講話をされたことがあったという。

戦局の苛烈化に伴つて、陸軍の第六航空軍は、昭和20年3月20日から、聯合艦隊司令長官豊田副武大将の指揮下に入ったので、及川大将は、直接指揮する立場ではなかったが、陸海軍航空の沖縄特攻作戦の最高責任者として、その苦衷を師と仰ぐ関口師に吐露したので、講話を試みられたことがあったのではないかと推察される。

及川大将は昭和20年5月29日、軍事参議官に転じ、後任は豊田大将、最後の聯合艦隊司令長官には、小澤治三郎海軍中将が補せられた。

ロ 音羽・護国寺に安置

平和観音会の活動開始に当たり、及川元大将は、河辺正三元陸軍大将(終戦時、航空総軍司令官)と相談し、陸海軍それぞれ二体を譲り受けることにして、広く関係者から浄財を集め、必要数を調達することが出来た。

このようにして、昭和27年5月5日に音羽・護国寺で、東久邇稔彦元宮殿下の御臨席を仰ぎ、開眼供養が行われた。かくして初めに完成した二体の観

音像は、寺内の忠霊塔に安置された。この時に使われた厨子は、栗鴨の所謂「戦犯」刑務所が制作したものであった。

ところが、観音像護持の目的で結成された白蓮社が、間もなく財政的に行き詰まつて、観音像は護国寺から立ち退かざるを得なくなった。

両元大将以下関係者は、上野・寛永寺、芝・増上寺、鶴見・総持寺の門を敲き、観音像の奉安を懇請したが、いずれも断られて行き場を失つた観音像は、暫時両元大将宅で預からざるを得なくなつていった。

ハ 救い手の出現

この苦境を知つた清水光美元海軍中将(終戦時予備役)は、睦賢和尚と同郷且つ一年先輩で、かねて親しい間柄であった。睦賢和尚は、この時既に、世田谷山観音寺を開山(昭和26年5月13日)しておられたので、元中将は和

尚に観音像の引取り方を打診された。先代睦賢和尚は、商人が創建したお寺にこのような由緒ある仏像を預かることは、誠に恐れ多いことと固辞され、開山に当たつて面倒を見てもらった浅草・金龍山浅草寺に頼んでみようとした。然しながら、有名寺に次々と断られ、困り切つていた関係者は、是非このお寺で、と繰り返し要請された熱

意にほだされて、陸賢和尚はとうとう引取りを承諾することになった。

このような経緯で特攻平和観音像は、本堂の聖観音の傍らに遷座され、開眼1年後の昭和28年5月5日には、2回目の慰霊法要が目出度く、世田谷山観音寺で執り行われるに至ったのである。

二 特攻平和観音堂の建立

陸賢和尚は、一般参詣者は聖観音に身体安全、商売繁盛等々のことを祈願するために来山するのに、御遺族は戦死された肉親の冥福を祈るために来山するのであって、祈願目的の違った参詣者が同じ本堂に相集うことは好ましいことではないと早くから感付いて、特攻平和観音堂を別途建立しなければならぬ、と決心されたという。

先代は、明治維新の神仏分離令で、華頂宮の手を離れた持念仏堂が人手に渡り、二人目の人が所有していることを知って譲り受け、現在地への移築が始まったのは、昭和29年である。

然しながら、陸賢和尚は昭和30年5月24日に遷化されたが、工事は賢照和



太田陸賢和尚 (社長時代)

尚が引き継いで、昭和31年5月18日に目出度く落慶法要が営まれるようになり、18日は、月例法要日となって今日まで連続として続いている。

元の厨子は大き過ぎて持念仏堂に納まらなかったもので、新たに厨子が造られた。その正面扉に菊の御紋章を飾ることを宮内庁に願ひ出て諒承された。

この厨子の中に祀られている二体の観音像の向かって右側の像に陸軍の、向かって左側の像に海軍の特攻戦死者の霊名を謹記した巻物が、それぞれの像の胎内に納められている。

ホ 知覧への分体

陸軍の関係者は、遅れて出来上がった二体の観音像のうちの一体は、陸軍沖繩特攻作戦の主要基地であった知覧

飛行場跡にお祀りすることが望ましいと、菅原道大元中將（終戦時、第六航空軍司令官）が、鳥濱トメさんに地元意向を打診したのである。トメさんが観音寺に来て、奉賛会の意向を確認し、町に戻って役場他関係方面に根回しをして、町を挙げて観音像を引き受けることになった。

知覧町で初めての慰霊法要が行われたのは、昭和30年9月28日であることから、トメさんが上京したのは、早ければ昭和28年中であったと思われる。遅れて完成した二体は、世田谷山観音寺で、関口真大師の手によって開眼供

養が行われ、海軍は、寺岡謹平元海軍中將（終戦時、第三航空艦隊司令長官）の友人、近江一郎氏（貿易商、終戦直



特攻観音堂 (世田谷山観音寺内)

世田谷山観音寺鳥瞰写真

正面奥本堂の向って左：特攻平和観音堂
手前道路と楼門を結ぶ参道の左側には現在は小田原の代官屋敷（昭和14年生田に移築されていた）が昭和35年に移築され客殿として使われている

後から全国各地の特攻隊戦没者の遺族を慰霊訪問して回ったという。）が、三浦半島観音崎の五島慶太氏の所有地に祀ることを画策されたが、うまく事は運ばず、その一体は現在、芝・増上寺の塔頭・安蓮院に奉安されている。

へ 財団法人化

昭和50年代になって、特攻平和観音奉賛会は、自然解散も止むなし、と考えられるに至ったが、第二世代の方々によって、特攻隊慰霊顕彰会に衣替えをし、竹田恒徳元宮殿下を会長に戴いて、昭和56年に再発足した。

平成4年5月12日に元宮殿下が薨去されて、瀬島龍三氏が後任会長となり、平成5年11月に財団法人化が厚生省によって認可され、翌年3月28日に千鳥ヶ淵墓苑で追悼式を挙行、同日午後、九段会館で設立総会が開かれて、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が発足した。

この辺りの経緯に関しては、会誌特攻第1号に、当時の理事長丸田文雄氏の、第4号に、第二世代の中心人物の一人であった秋山紋次郎氏の、及び第17・18号に、前理事長の最上貞雄氏それぞれ解説記事が掲載されているので、関心のある方は参照していただきたい。

二 世田谷山観音寺

イ 先代太田睦賢和尚

先代睦賢和尚は、明治22年9月21日に、長野の善光寺近くの造り酒屋の次男として呱呱の声を挙げた。祖父は善光寺のお坊さんの子息で、婿養子に入っておられた。

次男坊の身として、青雲の志を抱いて上京したのは20歳前後と思われる。明治41年に、51歳で布教のために来日した宣教師のM・H・コンウォール・リー女史を知ることになる。

リー女史は草津に居を構えて、癩病



(ハンセン氏病)療養所で奉仕活動を続け、地元から「草津のお母様」と慕われていた。女史の献身的な行為を目の当たりにした先代は、深い感銘を受けてキリスト教に帰依するようになり、女史の手で洗礼を受けて、「ニコラス」というクリスチャン名を授けられた。

女史の薦めもあったのであろう。更に深くキリスト教を学ぼうとして、外遊を思い立ったという。この事を知った先々代は、海外に出ることを思い止まり、得度するよう強く主張した。その結果、翻意した先代は睦賢と名乗り、仏教徒としての途を歩むことになった。

先代は商才にも長け、大正12年に、世田谷・三軒茶屋の地で、製菓・製パン業を起こし、近くの野砲兵聯隊の酒保に製品を納入することに成功し、社業は隆盛となり、その勢いは、先輩格の銀座・木村屋を凌ぐまでになったという。

大正14年の全国菓子コンクールで特賞を得た松陰饅頭の焼き印のみを変えたのが、現在の「特攻饅頭」である。「精養堂」という店名は、リー女史と日本初の神学博士今井先生によって名付けられた。得度後もキリスト教関係の人々との交流が、変わりなく続い

ていたことが判る。

更に睦賢和尚は、神官の資格も取って、戦時中は王子稲荷神社の禰宜として奉仕されたそうである。

先代の頭の中では、これら三つの宗教が調和共存していたのであろう。実に稀な能力と性格の持ち主であったことが窺われる。

宗教者は、己の懐が寒くは思うことを、思った通りに実践することは出来ない、という信念を堅持しておられたことも偉大といべきであろう。精養堂で自らの社会的、経済的基盤を確立することに、先ず全力投球をされたのであろう。

ロ 寺院開山

やがてお寺の創建を念願し、先ず土地探しに取り掛かる。現在地を購入したのは昭和12年である。当時は駒沢ゴルフ場の芝生の供給地であった。

土地造成は昭和14年から始まり、造業者は、現在、特攻観音堂の建つ一角に階段を付けることを主張したが、先代はこれを認めず、結果として、現在のお寺の佇いが保たれたことになった。終戦時には、敷地内に数軒の住宅が建てられていた。

精養堂は、戦災を免れたので、戦後いち早く寺院建設に取り掛かることが出来た。戦前に寺院建築物を建立・蒐

集していた資産家から、現在の本堂、六角堂（不動明王堂）及び樓門を譲り受けて、お寺としての体裁を整えることが出来た。

このようにして、昭和26年5月13日に、未だ都区乃至る所に戦災跡地が残っている時、金龍山浅草寺の手で聖観音の開眼供養が行われ、世田谷山観音寺がこの世に生まれ出たのであった。

ハ 特攻平和観音像安住の場

その当時、世田谷は曹洞宗の力が強く、睦賢和尚は土地の有力者から、曹洞宗派寺院となるべく、鶴見・総持寺の手によって聖観音の開眼供養を行うことを薦められた。

総本山から細かな事まで拘束を受けることを好まなかった先代は、その時一足早く祈願寺として独立していた浅草寺に倣うことにして、初志貫徹された。この時既に有力者は、総持寺との間で話を進めていたとのことで、そのような情勢下に屈することのなかった先代の強固な意志力には、敬服せざるを得ない。

開山の前後は、平和観音会による夢違い観音像の縮小模写鑄造は、既に軌道に乗って、及川、河辺両元大将の呼び掛けで始まった、観音像の募金運動も真つ最中であつたと思われる。

陸賢和尚以下、誰一人として夢想だにしなかった、特攻平和観音像と世田谷山観音寺が、2年後に結び付く運命の糸は、着々として手繰られていたのであった。

仮に観音像が、護国寺あるいは他の大寺院に安置されていたとしたら、現在のように、お寺と協会が一体化して、心の籠もった年次・月例の法要を営むことは、到底不可能であつたらう。これも、夢違い観音と特攻諸烈士の御霊のお導きによるものであることを、本記事を纏めるに当たって、改めて痛切に感じさせられたことである。

二 改修工事

移築後半世紀近く経って、お堂の老朽化が進み、賢照和尚は改修を決意され、会員各位に御寄進を願って、平成15年に工事が始まった。しかしながら、予想以上に修理箇所が多いことが判明した。

二次に亘る募金で、浄財は一千五十万余円に達し、平成17年9月23日、年次法要の直前に工事は完了した。

(文責 菅原道熙)

○観音菩薩とはどのような仏様か

綜合仏教大辞典には、次のように説明してある。

かのんーぼさつ 観音菩薩

(梵) アヴァローキテーシユヴァラ、Avalokitesvaraの訳。阿縛盧枳低湿伐羅などと音写し、瘡痂巨とも音略する。観世音・光世音・観自在・観世自在と訳し、観音・闍音・現音声ともいう。別名を救世菩薩・施無畏者・蓮華手・普門・大悲聖者と称する。慈悲救済を本願とする菩薩の名。

①法華経普門品(観音経)には、現世において衆生の厄難を救い、福德を与える菩薩として説かれ、苦悩の衆生が一心にその名を称えると即時に音声を観じて解脱を得させるとし、相手に応じて仏身から執金剛身にいたる三十三身を示現して衆生を導くという。華嚴経入法界品では、観音は南海補陀洛(Potalaka)山に住し、大慈の法門・光明の行を行じて、衆生の一切の怖れを除くとする。無量寿経や観無量寿経には、西方極楽世界に住し、勢至と共に阿弥陀仏の脇侍として、その教化をたすけるといい、平等覚経や悲華経では、阿弥陀仏の補処とする。密教では胎藏界曼荼羅の諸院に種々な形象の観音を安置する。その中、中台八葉院の西北方に白肉色で右手に開敷紅蓮華をもつ像を配し、観音院には正観音を部主とした諸尊を安じ、遍知院に准胝、虚空蔵院には念怒鈎・不空鈎・千手千

眼、蘇悉地院には一髻羅刹・十一面を置き、釈迦院・文殊院には釈迦・文殊の脇侍としている。観音を本尊とする観音懺法は追弔・祈祷・報恩のために行われ、また如意輪観音を本尊とする観音求聞持法は智慧を求めするために修される。

②観音を六道に配する説は陀羅尼集経などに見られ、摩訶止観には大悲・大慈・師子無畏・大光普照・天人丈夫・大梵深遠の六観音を順次に地獄から天までに配している。現在、東密では千手千眼・聖・馬頭・十一面・准胝・如意輪の六観音を地獄から天までに配し、台密では准胝の代わりに不空羂索を加えて六観音とする。また准胝と不空羂索とを並べ数えて七観音という。その他、千光眼観自在菩薩秘密経には八観音・二十五観音・四十観音を数え、諸尊真言句義抄には十五観音(正・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空羂索・白衣・葉衣・水月・楊柳・阿摩提・多羅・青頸・香王)、阿婆縛抄には二十八観音(聖・千手・馬頭・十一面・准胝・如意輪・不空羂索・毘俱胝・多羅・白衣・葉衣・念怒鈎・吉祥・豊財・不空鈎・多称・一髻羅刹・青頸・香王・阿摩提・蓮華頂・大梵天相・播拏自法・央俱捨・延命・勇健・四面大悲・除八難優)を挙げて

いる。仏像図彙には楊柳・竜頭・持経・円光・遊戯・白衣・蓮臥・瀧見・施薬・魚藍・徳王・水月・一葉・青頸・威徳・延命・衆宝・岩戸・能静・阿耨・阿摩提・葉衣・瑠璃・多羅尊・蛤蚶・六時・普悲・馬郎・合掌・一如・不二・持蓮・灑水の三十三観音を挙げ

るが、これらの中には、中国や日本の民間信仰によるものも含まれている。観音信仰がインドや西域で栄えたことは、多くの経軌が作られた事実と、大唐西域記などの文献やエローラ・鹿野苑などの遺跡から知られ、また、インド南部の秣羅矩吒国布呾洛迦山は観音の靈跡として著名である。中国では羅什が法華経を伝訳してからその信仰が大いに栄え、造像も盛んで、偽経や験記も著され、浙江省舟山列島の普陀山普濟寺が補陀落山に擬せられた。日本では、聖徳太子が救世観音を尊崇して以来その信仰が盛んとなり、主として現世の福業が願われたが、浄土教が起こつてからは、来迎の菩薩としても敬われた。平安時代には宮中で観世供が行われ、長谷寺・清水寺・石山寺などの観音霊場が上下の信仰を集め、のち西国三十三箇所巡礼が流行し、坂東などにも三十三箇所が設けられた。

(文責 田中賢一)

伊勢神宮第62回式年遷宮

陸士61期 飯田 正能

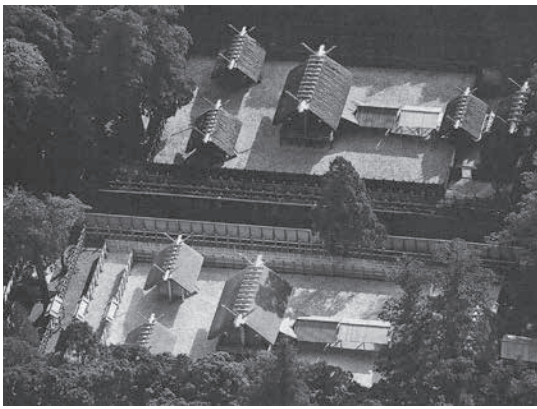
20年に一度の式年遷宮のクライマックスとも言うべき「遷御祭」の儀が、内宮は去る10月2日、外宮は同じく10月5日に斎行された。内宮では、御神体の「八咫鏡」が東の旧御正殿から西の新御正殿に移された。2日午後8時前、参道を照らしていた提灯の火が一

内宮新御正殿



斉に消され、内宮の神域は清らかな、汚れない浄間に包まれた。正8時、「カケコー、カケコー、カケコー」の鶏の声をまねた神職の「鶏鳴三声」が旧御正殿の下から響いた。天の岩戸に閉じ籠もられた太陽神の天照大御神を外に連れ出そうとして、鶏を鳴かせたという故事に因んだとされる儀式である。天皇陛下が代理として派遣された勅使手塚英臣掌典長が「出御、出御、出御」と唱えると、御神体を運ぶ行列がゆつくりと動き始めた。行列は旧御正殿を出て、38段ある階段を下り、御神

上(東)旧御正殿、下(西)新御正殿。遷御は旧御正殿から新御正殿へと雨儀廊を通って行われる。



前に供えるために新調された盾や鉾、刀などの神宝を持った神職を先頭に、奉拝者の前に姿を現した。神職ら約150人の列の長さは約80mに及び、鷹司尚武大宮司以下神職らが捧げ持つ御神体の「八咫鏡」は、白い絹の布の「絹垣」で囲まれ、松明の火に幻想的に浮かび上がる。その後ろを天皇陛下の第一皇女紀宮・黒田清子臨時祭主(祭主は、昭和天皇の第四皇女順宮・



遷御祭の儀に向かわれる臨時祭主の黒田清子様と神職ら

池田厚子様であるが、御高齢のため、御体調を考慮し、昼間の諸祭儀・御装束神宝読合の儀等は、祭主が執り行われたが、夜間長時間に及ぶ遷御祭の儀は代わって黒田清子様が臨時祭主を務められた。らが、平安時代の衣冠束帯の正装で続いた。旧御正殿から新御正殿までの距離は約300mである。御神体は雨よけの雨儀廊を通り、約20分後、檜の香り漂う新御正殿に入られた。御神体と御装束神宝が新御正殿に納められると、御扉が大宮司と少宮司により閉じられ、神職や参列員らが8度拍手(八度拜)して参拝した。神話を再現したとされる20年に一度の「神様のお引越」の儀式は、このようにして無事完了した。

遷宮は、神様がみずみずしさを取り戻し、永遠の発展を願う「常若」という神道の考えに基づくこととされ、遷宮では、社殿を全て建て替えるとともに、神様へ供える調度品や衣服、「御装束神宝」の全て計714種1576点を新調し、建築費を含む総費用は550億円に上ったとされるが、総て崇敬者の浄財と御奉仕によって賄われたという。また、旧社殿等は間もなく取り壊されて、用材は全国の主な神社に下賜されるが、御正殿の太い檜の棟持ち柱4本(内宮、外宮各2本)は、



内宮御正殿



外宮御正殿

五十鈴川に架かる宇治橋の前後の鳥居として再生される。

またこの日、遷御の時刻に合わせ、皇居の神嘉殿の南庭では、天皇陛下が伊勢神宮の方向に向かって拝礼の儀を執り行われた。

◇ ◇ ◇

伊勢神宮（正式には、皇祖・天照大神を祀る内宮を皇大神宮、天照大神の食を司る豊受大神宮を祀る外宮を豊受大神宮と称するが、通常は神宮又は伊勢神宮と総称する）では、今年（平成25年・2013年）第62回目の式年遷宮を迎えた。その第1回の式年遷宮は、第40代天武天皇の御発意による。その皇后であられた第41代持統天皇は、天武天皇の御遺志を受け継ぎ、称

制4年の後、即位の年の朱鳥5年（690年）に、先ず内宮の第1回式年遷宮を斎行され、その2年後には、外宮の式年遷宮を斎行された。以来、1323年の間、戦国時代の約120年間の中断と戦後の占領下の遅れを除き、現在まで20年に一度、営々と続けられてきた。

（注・式年遷宮は、制度発足以来、律令国家の一大事業として行われてきたが、平安時代になると、貴族や寺社の私的な荘園が各地に作られ、班田を基にした律令的土地制度が綻び始め、遷宮費用を賄ってきた朝廷の財源が揺らぎ始めたため、「役夫工米」という貢

米制度が執られ、役夫の代わりに米を納めるという臨時の税が全国に課せられ、遷宮費用に充てられた。その後武士の台頭によって公家から武士へと権力が移り、式年遷宮の存続も危うくなるやに見えたが、源頼朝の神宮に対する格別の崇敬により、東国の武士団にその信仰が広がり、遷宮は維持された。ところが、室町時代に入り、南北朝の対立などで、足利幕府の力が衰えると、20年に1度の式年遷宮が滞り始めた。

内宮第39回	1431年
内宮第40回	1462年
仮殿	1497年
仮殿	1521年
仮殿	1542年
仮殿	1575年
内宮第41回	1585年

31年ぶりに行われた内宮第40回の後、応仁の乱から戦国の動乱期となり、遷宮は120年以上途絶えてしまった。その間、内宮御正殿すら朽ちて造営されず、20年から30年に1度仮殿にお移して修理するなど臨時的な措置で凌いでいた。このような窮状に、伊勢の国司北畠一族や御師（信者の祈願の仲立ちをする一種の神職。後に伊勢講を組織して全国から参詣者を集め、神宮信仰を全国に広めた）や勧進尼僧が諸国を勧進して寄附を募り、遷宮費

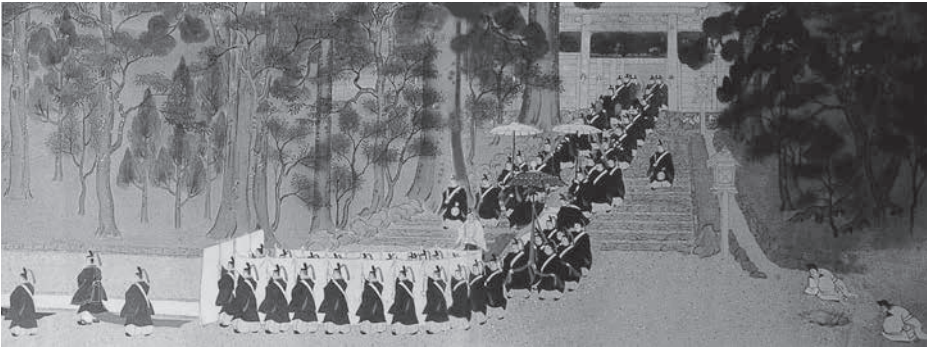
用を寄進するようになって、最早役夫工米に頼らず、寄附を募る方法に切り替え、今日に至っている。

天武天皇は、大海人皇子の頃、壬申の乱（672年）の渦中であって、吉野山から尾張へ逃れるに際し、伊勢の天照大神を遠くから拝んで戦勝を祈願し、戦いに勝利されたところから、御即位後、皇女の大来皇女を伊勢神宮の斎王とされた。斎王とは「いつきのみこ」ともいい、伊勢神宮に奉仕する天皇の未婚の皇女をいう。天武天皇は仏教はもとより、神祇の復興にも力が注がれ、伊勢神宮のみならず、諸国の多くの神社の社殿を修復された。

式年遷宮とは、20年に一度社殿を造り替え、御祭神を新しい社殿に遷し奉る神宮最大の行事である。

戦後、伊勢神宮は一宗教法人となったが、式年遷宮の斎行は、単に神宮の御祭にとどまるものではない。式年遷宮は、古来皇室にとって第一の重儀であるとともに、神宮無双の大宮と称されてきた。我が国、我が民族を挙げての大祭である。

新しく造り替えられる社殿は、内宮と外宮の御正殿を始め、御垣内の建物及び14の別宮（注）内宮宮域内2箇所、宮域外8箇所に内宮別宮という御正宮に次いで格式の高い宮があり、宮域内



遷御の様子を描いた『昭和4年式年遷宮絵巻』の右半分。神職に奉戴されて本殿から出御された御神体は新殿へと遷られる。(高取稚成画、神宮徴古館蔵)

別宮の第一は荒祭宮で、天照大御神の荒御魂を祀り、その第二は風日祈宮。御祭神は、級長津彦命と級長戸辺命、五穀豊穰神である。宮域外別宮の内、「瀧原宮・瀧原竝宮」は、伊勢市街か

ら宮川を遡ること約40km、支流の大内山川が流れる溪谷の山中に鎮座する。周囲は七洞岳や国見岩などの山々が聳える幽寂な環境で「伊雑宮」とともに「遙宮」と称される。倭姫命が天照大御神の鎮座地を求めて旅をしている時、瀧原の地に至り、この地を気に入って宮を建てたという。伊勢の内宮より古い元宮(起源と成る神社)である。宮域は約44万8000㎡、杉の巨木で鬱蒼とした境内は太古の自然を思わせる。伊勢と熊野を結ぶ信仰の道、熊野街道に面している。瀧原宮に和御魂、瀧原竝宮に荒御魂が祀られている。また、伊雑宮は、倭姫命が御贄地(神宮への供物を調達する地)を探して志摩に至った際、この地に天照大御神を祀ったのが創祀という。内宮から伊雑宮に通じる道が志摩路。伊雑宮は志摩国一の宮であり、志摩の漁師や海女に篤く崇敬されてきた。毎年6月24日、境内に隣接した御料田で行われる祭りが御田植式。御料田の中央に立てた大きな竹を倒し、それを裸の男たちが奪い合う竹取神事は勇壮で、香取神宮、住吉大社とともに日本三大御田植祭に数えられている。(の社殿全部である。そして、御神体を新宮に遷しまつる御神事を遷御祭と称し、その斎行の月日は、天皇陛下がお定めになるが、今年

は、内宮が10月2日、外宮が10月5日と定められている。

新しく造り替えられるのは、御社殿のみではない。御社殿内の御装束や御神宝も全て新調され、清々しい御社殿に御神体をお移し申し上げ、新宮においてまた20年間、皇室の御安寧と彌栄を、国家と国民の平安と繁栄を祈り続けるのである。遷宮によって天照大御神の御神威も、この国と人々の心も益々照り輝くのである。

式年遷宮は何故20年に一度なのかという問いについて多くの説があるが、20年というのは、社殿の耐久性と神宮の尊厳を守る上で適年とされ、また、建築技術や神宝作製の技術を伝承することの可能な年限であるとされる。また、弥生時代の穀倉に起源を持つ「唯一神明造」の大きな特徴は掘立柱と萱葺屋根であるが、当時既に奈良の大寺院などに見られるような高度の建築技術を有していたにも拘わらず、あえて耐久性の低いこの様式を残そうとした背景には、稲作を中心として国家を形成した史実があるからであろう。

なお、伊勢神宮にのみ見られるこの「唯一神明造」であるが、内宮と外宮の御正殿では若干の違いが見られる。その一つは千木であるが、内宮のそれは先端が水平に切られており、風穴は

二つ半であるのに対し、外宮のそれは先端が垂直に切られていて、風穴は二つである。その二は、鯉木であるが、内宮のそれは10本であるのに対し、外宮のそれは9本である。その三は、高欄の飾りの居玉であるが、内宮のそれは33顆であるのに対し、外宮のそれは31顆である。

また、御神宝の主なもの、玉體御太刀、御鏡、鶴斑毛御彫馬、金銅御高機、緋錦御衣(御装束)等である。

社殿や神宝を全く同様に新調することは、伝統技術の継承という面からも貴重な営みであり、それだけに式年遷宮は、その準備に費やされる年月が長い。遷宮の8年前(今回は平成17年5月)には、新宮の御用材を伐採する御仙山に祈りを捧げる山口祭が最初の行事として斎行され、同日夜には、御正殿の床下に建てる心御柱の御用材を伐採するに当たり、宮域内の山中で、秘祭・木本祭が斎行される。その1カ月後、6月の御仙始祭では、御神体をお納めする御樋代のための御用材を伐採するが、古式に則り、斧で約1時間かけて樹齢300年の檜の巨木を伐り倒すのである。

(注・遷宮には約1万本の檜を必要とする。その御用材を伐り出すための山、御杣山が必要である。持統天皇4年



『昭和4年式年遷宮絵巻』の左半分。御装束神宝を手にした、100名を超える奉仕員の列は、新殿へと続いている。

(690年)の第1回内宮式年遷宮から鎌倉中期までの約600年間は、神宮周辺の山が御杣山となっていたが、その後、檜の良材を求めて、御杣山は近隣の山々を転々と移り、江戸中期から

は木曾の山となり、現在に至っている。遷宮の7年前(今回は平成18年4月)には、起工式に当たる木造始祭が斎行され、続いて2年間2次わたって行われるのが、旧神領民の奉仕による御用材の御木曳という一大行事である(今回は第1次が平成18年5月〜7月、第2次が平成19年5月〜7月に行われた)。それに先立ち「役木」と称される重要な御用材を宮域に曳き入れる御木曳初式が行われる(4月)。

御木曳では、内宮へは五十鈴川での川曳、外宮へは伊勢市街での陸曳によって御用材が運ばれるが、清々しい初夏の薫風に乗って、勇壮な木遣歌と「えんやー、えんやー」の掛け声が伊勢の町中や五十鈴川の水面に響きわたる。この御木曳行事には、公募による「一日神領民」も参加できる。

御用材の準備が整うと、新宮を建てる新御敷地で鎮地祭が行われ(今回は平成20年4月25日)、遷宮の4年前には、五十鈴川に架かる宇治橋が架け替えられる。そして新しい宇治橋の渡始式が行われるが(今回は平成21年11月3日)、これには、全国から選ばれた親子孫三代揃った夫婦が参列して行われる。遷宮前年の3月、いよいよ新宮の造営が始まる。御正殿の御柱を立てる立柱祭に始まり、御形祭、上棟祭、

檐付祭、葺祭と続く(この内、立柱祭と上棟祭は、天皇陛下が御治定になるが、今回は立柱祭が平成24年3月11日(内宮)と13日(外宮)、上棟祭が3月26日(内宮)と28日(外宮)であった)。遷宮当年の8月には、新宮の御敷地に敷きつめる「御白石」を、伊勢の旧神領民や全国からの一日神領民によって奉獻する御白石持行事が盛大に行われる。9月には、御正殿中央の床下に心御柱を奉建する心御柱奉建の秘儀が深夜に行われ、次いで新宮の御柱の根元を固める杵築祭と新宮の竣工を喜び、平安に守護あらんことを大宮地に坐す神に祈る後鎮祭が斎行されるが、その日取りはいずれも天皇陛下の御治定を仰ぐことになっている(今回は、9月25日(内宮)・27日(外宮)と10月1日(内宮)・4日(外宮)と定められた)。

そして10月はいよいよ遷御の日を迎えることになるが、その直前には、御装束神宝誂合を経て、御装束神宝を始め遷御に奉仕する祭主以下神職ら全員を川原の祓所で祓い清める川原大祓が行われるが、供奉の神職らは百数十名にも及ぶ大がかりな祭儀である。そして遷御の当日、調進された御装束で新殿を装飾し、遷御の準備をする御飾の儀をもって、準備は全て整い、その日の夕刻より、遂に御神体を新宮に遷し奉る

遷御祭を迎えることになる。遷御祭は秘儀として暗闇の中で行われ、実相は知る由もないが、神宮徴古館蔵、高取稚成画伯の『昭和四年式年遷宮絵巻』により、その様子を窺い知ることができるといえる。その時の御遷御は向かって右の御敷地の古宮から左の御敷地の新宮へお遷し奉ったようであるから、今回の御遷御と同じコースで行われることになる。

遷御の翌日の早朝には、新宮で始めての大御饗が奉られ、同日、新宮の大御前に勅使が幣帛を奉る奉幣の儀が行われ、また、古宮に奉獻してあった神宝類を新宮に遷し奉る古物渡の儀が、また、その日の夕刻には、御神樂に先立って大御饗を奉り、新宮の四丈殿で勅使及び祭主以下参列の下、宮内庁楽部の楽士により御神樂と秘曲が奉奏される。こうして20年振りの式年遷宮は終了する。

式年遷宮は、国の永遠性を表現するものという。また、天皇を中心とした我が国、我が国民の成り立ちを、古代の祭祀や伝統が息づいていた日本の原型を、神宮という形で永遠に残そうとしたものではないかと思われる。古き良き伝統文化と神を敬い、先祖を尊ぶ謙虚な心、和の精神を大切に、絶えず若々しく未来へと繋ぐ姿を表すものと言えよう。(平成25年7月10日記)

特集

特攻インタビュー(第10回)

海軍航空特攻

岡本鐵郎氏

田中三郎氏

(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ



岡本鐵郎氏



田中三郎氏

「編注・当会では、特攻に関連する史実とその精神を後世に伝承するため、特攻関係者の体験談等を取材し、記録することを企画し、有志会員による「特攻ライブラリー」を立ち上げ、先ず、関係者のインタビュー記事を記録することにいたしました。特攻出撃の如何を問わず、特攻体験をされて九死に一生を得た方、特攻出撃を待機された経

験のある方等で、映像と写真を含めたインタビュー取材を引き受けて頂ける方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局までご連絡下さい。」

岡本鐵郎氏軍歴(略歴)

第十四期飛行予備学生 海軍少尉

松島海軍航空隊 九六式陸上攻撃機操縦

田中三郎氏軍歴(略歴)

第十四期飛行予備学生 海軍少尉

松島海軍航空隊 一式陸上攻撃機操縦

特攻ライブラリー取材スタッフ

(五十音順)

- 及川 昌彦 世話人
- 神崎 夢現 進行
- 倉形 桃代 記録

提橋 律子 世話人

須貝 智行 写真撮影

高橋 暢 映像撮影

長尾 栄治 インタビュアー・構成

◆学徒出陣で海軍に

岡本さんと田中さんは同じ年齢なのですか？

岡本…私が大正12年。

田中…私は大正11年です。

田中…お二人とも大学から海軍へ？

田中…学徒出陣です。昭和18年12月、海軍に入団です。

—— 学徒出陣で軍隊に入ることが決まった時、どう思われましたか？

岡本…学徒出陣で大学生の徴兵猶予が取り止めになったわけですが、止むを得ないなと思えました。大学に行っても、食べ物はだんだんなくなるし、本もあまり売ってないようになつたし。日本全体が負け戦の状態でしたから、大学に行つていようがいまいが、私たちのような若い者は征かなくてはならないという気持ちでした。

田中…私はもう、みんな軍隊に行くんだと、学生は軍隊に行くんだと思つていましたから、何の抵抗もなかったです。当時は学生の間にそういう空気がありました。私は海軍希望でしたが、

希望通り海軍に入れて良かったと思えました。今でも思います。

岡本…軍事教練で背囊を背負つたり、匍匐前進をしたり、何kmも何kmも歩かされましたからね。陸軍に入つて中国の奥地を歩き回されるより、どうせ死ぬなら、あっさりとして、華々しく、というんですけど、あっさり死ねる方がいいかなと考えていました。それに軍服も海軍の方がしゃれているしね。そういうことで、私も抵抗感はなかったです。それと、アメリカも大学生が軍隊に志願して、ヨーロッパ戦線や太平洋戦線に出ている。スポーツとして飛行機に乗っていた大学生が何万人もパイロットとして志願する。女性も軍隊に入つて、軍用機のテストパイロットを多くの女性がやったという話を戦後聞くと、ああ、アメリカもやっぱり国を守るということ、どんどん若い人が征つていたんだなど。むしろ日本は遅れているという感じがしました。

—— お二人とも出陣学徒壮行会には参加されましたか？

田中…ええ。

岡本…私は神戸大学で、神戸市にいたから、そういうのはなかったね。

田中…私は法政大学でした。壮行会のことあまり覚えていません。昭和18年12月に我々は海軍に入団することが

決まって、神奈川県・武山の横須賀第二海兵団に入りました。

岡本…私は広島県の大竹海兵団に入り、二等水兵を2カ月やりました。というのも、私たちの一期上の十三期は何千人も採用されて、どこの航空隊も一杯で収容できない。そこで、水兵として、まず海兵団に入らされて、そこでカッターとか手旗訓練とかもやって。二等水兵だから下士官の食事を運んだり、まあ洗濯まではやりませんでしたけど。

——大学から海軍に入ったのに、水兵をやらされたのは心外でしたか？

田中…軍隊そのものが初めての経験ですから、無我夢中でね。そんなに深刻に考えることもありませんでした。毎日夢が夢のように過ぎていきました。

——海兵団に入った後、搭乗員になるまでの過程は同じなのですか？

岡本…水兵の時に飛行科かそれ以外かに分けられるんです。飛行科以外だと陸戦隊に行くとかね。私たちは飛行科ということで土浦海軍航空隊に入っていて、土浦ではみんな一緒に、4カ月、基礎教程をやりました。

◆飛行科の訓練が始まる

——土浦でお二人は知り合ったのですか？

岡本…いや、もう何千人もいましたから。

田中…10何分隊もありましたからね。土浦で基礎教程を終えて、中練……中間練習機の教程に進み、九三式中間練習機、いわゆる赤トンボの訓練をやりまます。それが終わった後に機種が決まります。

岡本…その土浦でね、一本の棒の上を歩いたり、体操でとんぼ返りをしてみたりして、運動神経をテストして、誰は操縦、誰は偵察とか決める。運動神経があまり良くない人は要務に回るといった具合に仕分けされました。

田中…土浦ではほとんど体育。それと学科がありましたね。午前中、学科で午後が体育とかね。土浦では体を鍛えるというか、海軍の生活に慣れさせるというのが基本でした。

——お二人とも希望の機種とかあったのですか？

岡本…赤トンボの中練過程に入って、宙返りとかいろいろテストします。それで本人が希望して、戦闘機に行きたいとか、大型機に行きたいとか、ある程度の希望を出すわけです。その時、私は大型機を希望しました。

田中…最終的には海軍が、誰がどの機種に向いているかを判定しますから、希望が必ず通るとは限りません。仲間



93式中間練習機



96式陸上攻撃機

うちでは、体がガッチリした運動をやっていた者は艦爆に向いているとか、スマートなのは中攻に向いているとか（笑）。そんなことを言っていました。私が、戦闘機が一番多かったですね。私の班では半分が戦闘機を希望しました。あとは艦攻、艦爆、中攻などが数名ずつとあったところでしょうか。

岡本…やっぱり、勇ましい人が戦闘機や艦爆に行ったんじゃない？

田中…そうね（笑）。

岡本…ややおとなしい人が艦攻かな。私が赤トンボで宙返りをした時……あれ、下から見ると飛行機が緩やかに円

を描いているように見えますが、操縦席では体がグーツと押し付けられてね、ギユウギユウになっているわけですね。ギユウギユウ押し付けられて、しかも反転するとかね、これはかなわないと（笑）。で、戦闘機は操縦1人、艦爆、艦攻も操縦は1人でしょ。敵弾に当たればそのまま墜落しますよね。でも陸攻は操縦2人でしょ。メインとサブがいますから。1人が死んでも、もう1人が生きて操縦すれば……で、エンジンも2つでしょ。だから何とか基地にたどり着けるのではないかと。とすると、陸攻の方がやや安全。

それに陸攻は航統距離が長いから、もしかしたら台湾、香港くらいまでは行けるのではないか。死ぬ前に外国も少し見れたらいいなと（笑）。少し欲をかいた（笑）。

田中…機種を選ぶと言っても具体的に知っているわけではないですから、どれがいいかなんて正直、分かりませんよね。私は中攻を希望したわけではなく、選考で回されました。中練を終えると実用機過程に進みます。私は宮城県

の松島海軍航空隊に行きました。そこでまず、九六式陸上攻撃機に乗ったわけです。いや大きかったですね。赤トンボなんか入っちゃうくらい大きい。こんな大きいのを操縦するのかわと思いました（笑）。
——お二人とも飛行機の操縦ということですが、それが決まった時のお気持ちは？

田中…特別、操縦を希望していたわけではありませんが、ああ、自分に合っているなと思いました。自分の興味のあ

ました。だから、飛行機の操縦というのは自分の性分に合っていたんですね。岡本…私は海兵団で「飛行適」ということで、腹を括って土浦に行きました。

まあ、予科練の人ほど張り切っていたわけではありませんが、これで死に花が咲くという思いでした。艦船勤務や陸戦隊もありましたが、私は飛行機に人生を賭けたという気持ちでした。
——土浦を卒業された後、どの航空隊に行きましたか？

岡本…私は土浦の基礎課程の後、鹿児島県の出水海軍航空隊で赤トンボの訓練をやりました。出水は天気良くて訓練は4カ月で済んだんですが、田中さんが中練課程で行った美保海軍航空隊は鳥取県で、天気が良くないので遅れたようです。

田中…私は昭和19年5月から12月まで、美保空に半年ほどいました。

◆松島海軍航空隊

——中練課程を終え、お二人とも松島海軍航空隊に移ったのですか？

岡本…そうです。
田中…松島で一緒の部隊になったんです。

——松島時代に知り合ったのですか？

田中…いや、同じ飛行機に乗ることは

ありませんでしたから、まだ知り合っていない。岡本さんの方が私より早く松島に来ていました。同期ですが、彼の方が早かった。

——松島に移った頃はもう士官になつていたのですか？

田中…そうです。海軍少尉です。
岡本…昭和19年12月に任官しました。

——少尉ということは搭乗する飛行機の機長になるわけですか？

岡本…いやいや。少尉と言ったって、陸攻の操縦は初めてですから、海軍兵学校を出た人や予科練出身のベテラン下士官が教官や教員になって、まずは離着陸から教えてくれるわけです。1機に予備学生が4人から5人、一緒に乗って飛んでいる最中に交代するわけです。

——予備学生が海兵出の士官や、下士官にいじめられたという話を聞きますが、そういう体験をされましたか。

田中…ありました。海兵出の士官は俺たちが本職だという意識があるんですよ。我々は大学から海軍に入って、海軍生活も短いわけですからね。特に、同じ年齢の人は対抗意識もありましたからね。

岡本…下士官の人はね、飛曹長になつているような人も、絶対に我々に手を出すようなことはしない。ただ、海兵

出身はね、71期生が我々と中学校が一緒で、72期、73期はその下で、我々より若いんですけど、何日間か早く少尉になったんです。で、私の感じでは海兵の若い連中が、非常に予備学生にきつく当たりました。理由があつてもなくても殴る。私なんかもずいぶん殴られました。同じ少尉ですけどね。

——それで、予備学生が団結したという面もありましたけど、ある航空隊では13期と14期の予備学生が集まって、海兵と一戦ケンカをやるうと、あわや大乱闘になりかけたこともあつたそうですね。

◆生と死

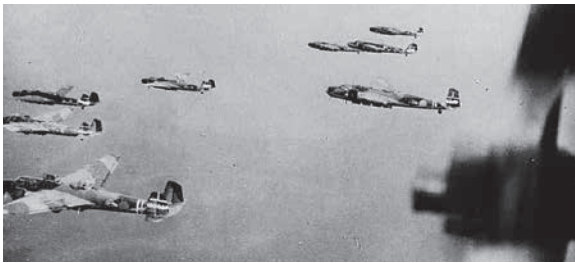
——海軍予備学生を扱った戦争映画などもたくさんありますが、そういうものをご覧になりますか？

岡本…私は逆に、海軍の航空隊がらみものは見たくないですね。ああいう状況で友達がみんな死んでいったなあと思ひ出しますから。

田中…私はね、もう大分、前になりましたが、アメリカ映画で「メンフィス・ベル」という映画がありましたね。ヨーロッパ戦線でアメリカの大型爆撃機が、イギリスのスコットランドからかな、ベルリン周辺を爆撃するという映画があつたんです。それを見た時、出



96式陸上攻撃機



96式陸上攻撃機

撃したアメリカのB17が高角砲に当たって、搭乗員に負傷者が出るんです。その時、「こいつに落下傘をつけて降ろせ」と言うんですよ。「基地に戻るまで待ってては助からない」、「敵地に落下傘で降ろしたら、命が助かるかもしれない」と議論し合うシーンがあったんです。あれには驚きました。まあ、映画だからそういう人道的なシーンを入れたのかもしれませんが、我々の軍隊生活を通してみても、日本ではあり得ないと思えました。本当にあったのかどうかは分かりませんが、あのシーンを見た時は考えさせられましたね。

——海軍航空隊で搭乗員が負傷したら？

田中…敵地に降ろすなんてことは絶対にしません。我々の知る限り、日本の軍隊でそんな考えはありませんでした。

——そのシーンは、日本人とアメリカ人の考え方の違いを象徴しているところか？

田中…それと、もう一つ感じたのは、彼らは何回爆撃に行ったら本国に帰すというルールがあるんですね。生きる希望を持たすために、そういうルール

があったと思いますが、我々はそういうことは考えもしませんでしたね。

——そうすると、特攻という考えはアメリカ人には出てこないでしょうね。

岡本…出ない。田中…出ないでしょうね。

——今、改めて特攻というものをアメリカ人や外国人に伝えるとしたら、どのようにお話をされますか？

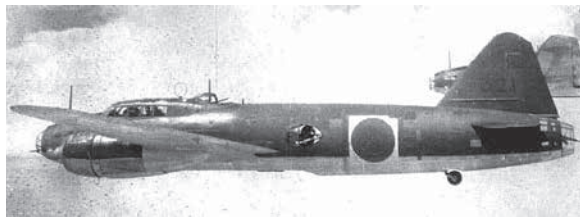
田中…難しいでしょうね。生還の見込みのない攻撃と言っても……少なくとも我々は純粋な気持ちでね。国のため、親兄弟のために犠牲になると……それは人間ですからね、どんな場合でも「生」というものは執着があると思えます。

岡本…私はね、出水の航空隊にいる時の教員が、みんなラバウルとか、ミッドウェーで負傷した人たちが教員でした。もう、空母はほとんどない。でも、フィリピンから沖縄へとアメリカ軍は上陸してくる……そして、松島空にいる時、……田中さんはもう出撃していたけど、第4次か第5次の出撃で、黒板に私の名前が書いてあるのを見たんです。「岡本鐵郎」と……。その時は足がプルプルと震えてね。体が地面にめり込むような感じで、もうこれで死ぬんだと……。

それで、話は前後しますが、松島海軍航空隊と豊橋海軍航空隊から第1次、第2次特別攻撃隊が出水に行った。

で、私は松島にいる時、すべて特攻だと思っていたんです。ところが、豊橋海軍航空隊飛行長の巖谷二三男少佐が鹿屋の第五航空艦隊司令部に、「オリーブの九六式陸攻や一式陸攻で特攻に行くのは、みすみす落とされに行くようなものだ。だから、夜間爆撃に切り替えてほしい」と言って、夜間爆撃に方針が変わったんです。

ところが、それを我々は知らないし、1次も2次も3次攻撃隊も帰ってこないから、特攻で出撃したと思っていたら、実は特攻はやめて夜間爆撃になっていたわけです。それを知らないものだから、私はもうこれで終わりだと思っただけです。それから地面にスーッと沈み込む感じだね、空がフーッと離れていっちゃうんですよ。これで、4、5日後には死ぬんだなと思うと、親父が悲しむだろう、お袋が悲しむだろうと思うんだけど、不思議とこう下腹の辺りからね、いや、やっぱり行こうと。もう敵は沖縄を攻撃して、いずれは本土の九十九里とか相模湾とかに上陸して日本民族はやられちゃう。だから、せめて敵の輸送船でもいいから当たって、少しでも日本の被害を減らそうと。



一式陸上攻撃機



一式陸上攻撃機

の航法訓練をやらされたのはこのためだったのかと分かったんです。

私は4月末に松島を出発したんですが、同じ日に出発した同期が3人いたんです。もちろん飛行機は別です。それで、出水に着いて、最初に我々の機が沖繩に出撃することになったんです。

岡本…松島で夜間訓練をしたのですが、訓練中に急に霧が出て2機が行方不明になる。また、霧が出なくて天気がいいのに2機が行方不明になる。1機に同期生が3、4人乗っているんです。陸攻だから一度に10何人も死んでしまう。それに燃料がないから、昼間の訓練でも夜間の訓練でも燃料がないと休んで、飛行場の雪かき……。燃料もどうやら芋のアルコールが入っているらしくて、エンジンのパワーが出せない。だから、途中でプスプス落ちてしまう。私も着陸のため旋回している時にエンジンが止まって、松林に落ちて1週間か10日くらい意識不明になったことがあります。同乗していた同期生は重症でその後、一生病院生活でした。だから、訓練をしたくても燃料がない。飛行訓練に出ると行方不明になる。そういう中で田中さんたちが出撃して沖繩攻撃をやるということですよ。

田中…三陸沿岸というのは、春先に海霧が発生しやすいんです。だから訓練中に随分、殉職者が出ました。

夜間飛行自体、危険だったのでしょうね。

田中…相当、無理してやったんでしょね、飛行機の性能的にも。燃料も質が落ちてましからね。そういう中での訓練ですから事故も起きやすかったですよね。

岡本…それと、一式陸攻にエアコンがあったかどうかは知りませんが、九九陸攻にはエアコンがなくて、高度2000m、3000m上がると寒くて、ブルブル震えていました。あと、機材が支那事変の渡洋爆撃に使われたもので古いから、隙間から風が入る。それで、搭乗する時、飛行靴で芝生を踏むから泥がついて、それがホコリになって操縦席に舞うんです。だから、飛行眼鏡をかけて操縦する。機内は冷えていいるからおもしろい。九九式陸攻にはトイレがないんです。一式陸攻には小さなオマルがありました。だから、着陸して解散になったら、みんな一斉にトイレに行つて、まずフンドシを代えて（笑）。それが現実でした。

田中…上空で操縦を交代するくらいだから、飛行時間が長いでしょ。

そういう気持ちがお不思議とお腹の中から湧いてきて、それから頭の方にも来て、「ああ、自分も死ぬるな」と、泣いたり喚いたりしなくて死ぬると思つて、思わずニッコリしてね。それで、自分の宿舎に帰りました。恐らく、田中さんにしても全員ね。あの負け戦で、日本人は皆殺しとまではいなくても半数近くは艦砲射撃と爆撃で殺されてしまう。それを少しでも防がなくてはという気持ちでみんな出撃したのではないですか。

田中さんの時はまだ、特攻隊としての出撃でしたが、その時のことを

教えてください。

田中…確か、昭和20年3月頃でした。攻撃隊のメンバーが発表になって……。その頃は志願ということでもなく、特別な理由がない限り、みんなに割り当てられたと思うんですが、メンバーが決まってから、松島では夜間の訓練だけでした。上層部はもう分かっていたのかもしれないね。我々をどう使うのかと。それで、金華山と青森県の尻屋岬、北海道の襟裳岬の三角形を夜に飛ぶ。昼は何にもしないんです。毎日、夜ばかり訓練させられました。それで、アメリカ軍が沖繩に上陸して1週間目に、いよいよ沖繩の爆撃に行くという命令が出て、その時に、夜間

岡本…3時間とか4時間とか……。

田中…午前中なら午前中いっぱい飛行作業ですからね。でも、九六式陸攻から一式陸攻に代わって大分良くなりましたね。やっぱり一式陸攻は新しい機体だし、九六式陸攻も悪い飛行機じゃないけど、一式陸攻に比べれば性能が落ちますから。一式陸攻には空調もありません。排気管を通して暖房にはなっていたわけです。

——空調以外に装備での不満はありませんか？

田中…通信機能が劣悪でした。アメリカと相当、差があったんじゃないですか。零戦とか世界レベルに達した技術もありましたが、通信機能はひどかったと思います。

岡本…レーダーでも、すぐに捕まえられてバタバタと落とされましたね。敵からすれば狙い撃ちですよ。私は九六式陸攻までしか乗りませんでしたけど、防弾が弱かったですね。

◆特攻から夜間爆撃に

——松島を出撃した時は特攻のつもりだったはずが、夜間爆撃に変わっていったということですが、それは出撃先の出水で知ったのですか？

田中…松島を出撃するということは、沖繩への攻撃に参加するということが

すからね。直前まで具体的な命令は出ませんでしたけど。

岡本…でも、松島では特攻と言われたのか、言われなかったのか。田中さんはどうでした？

田中…特攻とは言われませんでしたね。でも、特攻と同じですよ。

岡本…搭乗割の黒板に、「第〇次特別攻撃隊」と書かれているんです。だから、我々はみんな、特攻だと思っていました。だから、私より先に出撃した田中さんたちはもう死んでいると思っていました。

田中…普通の攻撃でも出撃したら99%は生還しないんですからね。それを知っていましたから、特攻だろうが、通常の攻撃だろうが、あまり意識しませんでした。出撃すれば死ぬんだと思っていました。

——田中さんは何次の特別攻撃隊として出撃したのですか？

田中…第4次だったかな……。昭和20年5月6日に沖繩に向け、出水を出撃しました。午前零時過ぎです。一式陸攻に250kg爆弾を2発、60kg爆弾4発を積みました。約1t近い爆弾をかかえたわけです。魚雷1本よりも重いくらいですね。それで離陸するのは、やはり大変なことなんです。離陸に失敗した人もいますからね。

私の飛行機には、右側の操縦席に和田飛曹長という、私より10歳くらい年

長のベテランがいました。それから、搭乗整備……整備と言っていました。が、機関関係を扱う人ですね。それも、榎木野（ならきの）上飛曹長という歴戦の人がいました。ペアは6人でした。操縦が2人、整備が1人、偵察は13期飛行予備学生の榎本中尉（旧姓・鳴門）、あとは若い下士官でした。戦争の場数を踏んだ人がいましたから、生還できたのもそのおかげだと思います。

さっきも言ったように、過重状態で離陸するわけですから緊張しました。離陸後、私たちは沖繩の北飛行場の爆撃に向かいました。快晴で、月は出ていませんでしたが、星がきれいでした。それで、高度5500mで、東シナ海を西寄りのコースをとりました。沖繩にアメリカ軍が上陸して、飛行場を全部占領してしまっていたからね。途中で落とされる可能性は高かったです。敵の夜戦を警戒して、遠回りしましたから時間が掛かりました。でも、その方が安全だったんです。

それで、北飛行場までたどり着いて、爆弾を投下する前になると、前方に閃光がパッパッパと走ります。最初、なんだか分かりませんが、敵の対空砲火なんです。その中を突っ込

むわけですから大変、緊張しました。高角砲の至近弾の衝撃で飛行機はものすごく揺れるし、もつと近づくと、今度には花火の中に入ったような、火の粉の中に飛び込んだような感じでした。こっちは実戦は初めてですからね、もう無我夢中で、何が起きているのかもわからず、言われて、ああ、そうかという具合で（笑）。なにしろ、至近弾の衝撃というか、下からズーンと突き上げるようなね。また、破片があちこちに当たります。直撃を受けたらひとたまりもありません。弾幕に入ると空が真っ暗になります。煙でね。それで、一式陸攻は気密性が良くなって、火薬の匂いが機内に入ってくるんです。その印象が強いですね。それで、一式陸攻の尾部に銃座があるんですが、そこで、川口二飛曹が欺網紙を撒いていたんです。アルミ箔で敵のレーダーを欺くためです。アメリカの高角砲はレーダーで撃っていますからね。だから、敵弾は後ろ後ろに行かれます。前方で爆発したら一式陸攻なんてひとたまりもありませんが、後ろで爆発したから、そういう意味では非常にうまくいったわけです。で、高度5500mで飛んでいるでしょう。下を見ても何も分かりません。飛行場に爆弾を全部落としたつもりです

がね。飛行場を通過した直後、左エンジンが止まったんです。一式陸攻は口ケット排気になっていってます。排気管が分かれているんですね。だから、きれいに青色に光っている。それがバツと消えてしまった。プロペラも止まった。これはやられたと思って、和田飛曹長が必死に操縦をしました。それでみんな得手動ポンプを動かして……重いから疲れるんですよ。それで、何とか対空砲火の圏外まで出ました。そうなるよね、早く九州の基地に戻ろうと頑張りました。

いやあ、弾幕を抜けるまでの長かったこと(笑)。時間にしたら、ほんの数分のはずですけど、非常に長く感じました。ああいう時の機内の雰囲気というのは異常ですね。6人が乗っているわけですが、誰も何も言わないんです。だけど、お互いの考えていることが分かるんですね。不思議ですけど、何も言わなくても、みんなの意思が伝わっていました。

その後は、ひたすら九州を目指して飛び続けましたが、朝日が昇る頃、薩摩半島の突端にある開聞岳が見えました。その時は、「ああ、九州に着いた」という安堵感が初めて起きました。——1つのエンジンだけで帰還できたのですか？

田中：動いたり、止まったりしながらでした。

岡本：よく、エンジンがもめましたね。田中：さっき言ったベテランの力ですね。楠木野上飛曹は燃料を余計に積んでいて、それも役に立ったと思います。それで、出水に着陸したんですが、60kg爆弾1発が弾倉に残っていたんです。あれがよく着陸の衝撃で爆発しなかったと思います。実に運が良かったですね。整備兵がみんな驚いていました。何しろ、被弾箇所が30数カ所ありましたから、あの一式陸攻が火も噴かず、よくもったと思いました。

岡本：機長の榎本中尉が「もう自爆する」と言ったそうですね。

田中：川口、楠木野といったベテランが、まだ助かるという見込みを持っていましたけど、それに耳を貸さないで、「もう落ちましょう。自爆しましょう」とね……。生死の境というのは本当に紙一重だと思えます。

——弾幕から脱出した後は、機内の雰囲気も変わりましたか？

田中：それは変わりましたね。みんな、生きようという意欲が……人間だから本能的にあるわけです。何とか九州へ、出水に帰らなければならぬ。だから、さっきも言ったように開聞岳が見えた時、ちょうど朝日が上がって、開

聞岳はきれいな円錐型の山ですからね。「ああ、九州に着いたな」と。それは嬉しかったですね。その時は、もろどこに不時着してもいいと思います(笑)。それで、その時、サイダーか何かを出撃してから初めて飲んだ記憶があります。

——ペアになった搭乗員たちとは、その後も一緒だったのですか？

田中：出撃で川口飛曹長が負傷したんです。耳たぶのところを高角砲の破片が当たったんでしょうね。血だらけになってマフラーを巻いていました。それで、ペアが半端になったということもあるんですが、松島に原隊復帰することになりました。その時、一式陸攻は置いて、九六式陸攻で帰りました。そこでペアは解散しました。

——田中さんが昭和20年5月6日に沖繩に出撃された頃、岡本さんは松島にいたのですか？

岡本：はい。昭和20年5月7日に第5次特別攻撃隊として黒板に名前が出ましたが、翌日に取り止めになって。それで、6月1日くらいでしたか、松島空は今度、作戦のため、銀河隊と一式陸攻の基地になる。それで、練習航空隊の松島空は北海道の美幌で訓練を続ける。で、私と同期生が10人くらい美幌に行きました。残りの人は福島県の

郡山や山形県の神町に行って、赤トンボで最後まで戦うことになりました。私は運悪く、美幌組に入っちゃった。それで美幌で訓練をしていたわけですが、そのうち、アリュージャン方面から敵機動部隊が来るという情報が入りました。いよいよ最後の攻撃だといので、8月14日くらいの晩から飛行場の照明をつけて、掩体壕から飛行機を出して、爆弾や魚雷を積んで、格納庫の前でエンジンを始動して出撃の時を待っていました。そして、翌8月15日の朝、暗号係だった同期が、「岡本君、停戦だよ。戦争は終わったよ」と言うんです。驚いて宿舎に帰って、みんなに「戦争が終わった」と言ったら、「岡本、冗談もほどほどにしろ。ぶん殴るぞ」と言われました。だから、敵の機動部隊に最後の攻撃に行く直前で助かったわけです。

◆終戦の日を迎える

——田中さんは松島に戻った後はどうされたのですか？

田中：松島というのは海岸線から近い飛行場ですから、艦砲射撃を受けるといので、飛行機はすべて神町航空隊……今の山形空港がある場所に持っていったんです。昭和20年7月頃のことでした。でも、結局そこも敵の艦載機

の攻撃を受けて、地上ですべて破壊されました。それで飛行機がなくなってしまう。そのまま、そこで終戦を迎えたわけです。終戦の話聞いた時は気が抜けたみたいになりました。

岡本…私たちは北海道の美幌にいたんですけど、8月が終わっても復員できない。ところが内地の航空隊は復員ということで、戦闘機でも何でも乗って郷里に近い飛行場まで飛んでくるんです。美幌でも千歳でもそういう飛行機が飛んでくるのに我々には復員命令が出ない。それで同期と話して、命令が出なければ函館まで歩いて行って、津軽海峡を泳いででも本土に帰りたいと相談している間に、やっと復員命令が出ました。それで貨物列車で函館まで行きました。

——ご実家はどちらにあったのですか？

岡本…東京です。

——田中さんは終戦後、すぐに復員できたのですか？

田中…山形県の神町にいましたが、終戦になったというところで、8月末には帰れと言われました。私も家は東京でした。貨物列車で帰ってきましたよ(笑)。

◆日本の思い違いで始まった戦争

——終戦後、大学に戻られたのですか？

岡本…学徒出陣で繰上げ卒業になっていましたが、大学側は復学しろと言ってきました。実際、入学したのは昭和17年4月で、昭和18年12月には海軍に入ったわけですから、仮卒業ということでした。だから、余裕があったり、住むところがある人は大学に戻って勉強した人がいたかもしれませんが、私には行かないで、すぐに就職しました。大学に戻っていたら、今頃、神戸大学の教授くらいになっていたかもしれない。惜しいことをしました(笑)。

——仮卒業ということですが、復学しないと卒業扱いにならないのですか？

田中…いや、卒業になっていますよ。昭和19年3月卒業ということになっていきます。だから、仮卒業と言っても、そのまま、繰上げ卒業になったんです。私たちより下の人は復学しましたね。

私も復学はしないで、昭和21年に就職しました。

——大学時代、こんな学問をした。こんな仕事をやりたいというものはありませんか？

岡本…私は西洋史に興味を持って、大学のゼミも西洋経済史を選びました。社会の仕組み…日本だと古代から中

世、戦国時代から徳川時代へと…社会はこういう風に変わっていったんだと。ヨーロッパはどういう風に発展してきたのかと思い、まず、イギリス経済史に取り付いたところで、学徒出陣になったのですがね。世界のいろんな国が、いろんな宗教を持って、いろんな経済機能を持ちながら興亡を繰り返していくのをまず知ろうと。それで、小さな島国である日本が、どうやってこれからやっていくのが何となく心配でした。本当はもっと勉強して、経済史なり、社会経済史なりをかじってみたかったなと思います。でも、戦後、復員したら、学生に戻るなんてとんでもない。まず、食えることが最優先でしたから。

田中…今、思えば、あの時、あれも勉強すればよかった。これも勉強すればよかったと思いますよ。今、言っても仕方がないですけどね(笑)。

岡本…私たちの時代は高等学校くらいから、夏目漱石、森鷗外、ドストエフスキーを読んでみたり、トーマス・マーンをかじってみたり。食料が不足していたから、近くの空き地で芋を作った。でも、合唱をやったり、楽しみもありました。だけど、支那事変から太平洋戦争と、ひしひしとね、何か精神的に落ち着きませんでしたね。周りは出征

兵士でどんどん出て行く。新聞は勝った勝ったと報道する。こんなに簡単にアメリカに勝つのなら、これは有難いことだと思いましたがね。今、飛行機の生産数とか、日米の数字が出ていますけど、それを見ると、何で戦争を始めたのか分からない。どういう計算があったのですかね。

——アメリカとの戦争がなぜ行われたのか、何かご意見がありますか？

田中…あの当時もね、若い人の中には、戦争に対して非常に懐疑的だった人もいました。それは少数でしたけど、いたことはいました。戦争に懐疑的で批判的だった人はいました。

岡本…土浦で知り合った東大出の予備学生は非常に懐疑的でした。日本はこんなことでは負けると言っていましたね。頭のいい人はもう分かっていたんです。その彼は要務士に回されて、結局、フィリピンクラーク飛行場に行つて、陸戦で戦死しました。私自身も海軍に入つて、下士官は下の者を使い使う。海兵出は予備学生をいじめる。戦後、海軍上層部のやったことを知ると、海軍にいましたが海軍への不信感というものがあります。

チャーチルの「第二次大戦回顧録」に書いていましたが、日英同盟はアメリカの強い要請でイギリスから破棄す

ることになったらしいですが、イギリスもアメリカもドイツのヒトラーが暴れまわるし、ソ連は大きくなるし、中国には共産主義がどんどん入ってくる。それで、日本は満州、北支くらいまでは国土が狭いから与えて、ファシズムと共産主義の防波堤として頑張ってもらいたいと考えていた。それが突然、ドイツと日独伊三国軍事同盟を結び、ソ連とも不可侵条約を結ぶ。そして、フランス領インドシナ半島に進駐する。それでは困ると禁輸をしたら、日本は禁輸されたから今度は真珠湾攻撃だ……。だから、日本は思い違いをしていたんですね。日本は上海までの進出に止まって、蒋介石を助けたり、うまくやっていたら、イギリスやアメリカを味方にできたかもしれない。イギリスやフランスはドイツにやられて、アメリカに助けを求められない。とても太平洋で日本と戦争をする気はなかった。だから、私は残念でならない。でも、日本人が、朝鮮や大陸で何千万という異民族をうまくマネジメントできたかというタメだったと思います。だから、日本人は小さく、静かに、貧しく、チマチマと生きながら終わるのかもしれない。

田中…基本的には教育です。誤った教育のため、ああいう大きな戦争に巻き

込まれた。閉ざされた偏向教育というのは怖いと思います。

岡本…天皇陛下の「て」を聞いたら、もうバツと背筋を伸ばさなければならぬ。で、正月だ、何だというとき、みんなでゾロゾロと宮城前広場（現・皇居前広場）に行く。それもいけれど、軍隊が天皇を利用して、「天皇のため」「神国のため」「八紘一宇だ」と言っていて、そういう理由で滅茶苦茶に訓練をやるわけです。だから、私たちは高等学校、大学を出て良識がある者にとってはバカバカしかったですね。

——そうすると、軍隊に入るのが嫌だった学生もいたのではないですか？

田中…いましたね。

岡本…でも、そういうことを言える雰囲気ではありませんでした。みんな、死に物狂いでやっていたら、今さうだ、いい悪いではなく、国と国が殺し合いをやっているんだから、その時に嫌です、なんて言えません。みんなそうだったと思います。

田中…今でもあるんじゃないですかね。正論が通用しない。正しい考えが通らず、全体がある一つの方向に進んでいく。今の時代でも同じことがあると思います。普通の社会でもね。

◆若い人へのメッセージ

——今の若い人たちに伝えるメッセージのようなものはありますか？

田中…当時の若者は視野が狭かったと思います。日本人全体がそうだったかもしれませんが。今は情報がどんどん入ってくるから、若者も視野が広がる。私たちは限られた世界の中にいて、学生でも限られた情報しか入りませんでしたから、今とは状況が全然違いましたからね。だから、今の若い人はそういう意味では幸せだと思います。どんな情報でも自由に取れるという時代に生きていくわけですから。

岡本…私はたまたま中近東や東南アジアに行つて、イギリス人やアメリカ人がコンサルタントとかで、単にフォードとかGMを売るだけでなく、発電機も海水蒸留装置などその国にインフラに入り込んでいる。それから欧米の石油資本がサウジアラビアとかクエートとかで、炎天下で頑張つて石油の試掘をして、当たれば石油が噴出すけど、当たらなければ何千万の損と、そして、沖合にターミナルを作ってパイプで陸上に持つてきて、どんどん輸出している。それからまた、マレーシア辺りでは中国人が金融から何から牛耳つていて。特にマレーシアとかタイとかでは、英米系の肥料会社とか農業専門会社がゴムとかを、植林して栽培して新

種交配して、それを製品化する。それをジャングルに10年20年住み込んで開発する。それに、現地民を何万人、何十万人と使いながら、マレーシアならマレーシアに、タイならタイに病院を建て、学校を作り、ホテルを作る。イギリスなんかはマレーシアにオックスフォードとかケンブリッジの出版社が来て、そこにマレー語と英語の教科書を作る。つまり、自分の利益も取るけれど、現地民のために産業を育成しているんですね。中近東でもシエルとかの石油資本が、単に石油を採掘するだけでなく、陸上に施設を作つて、まずホテルを作り、公園を作り、ゴルフ場を作り、映画館を作り、それからモスクを作り、ヒンズーの寺院を作り、もちろん教会も作る。各国に入って国事に協力しているんです。そして、現地に高い給料を出している。だから、タイやマレーシアから日本に来る留学生は、帰国しても日本企業に勤めないで、欧米系の企業に行くんです。給料も全然違うし、与えられる権限がまた違います。日本企業の場合、主要なポストは日本人が占めちゃう。

クエートで痛感したのですが、欧米人が何であんなところで頑張っているかというところ、派遣された欧米人自身も

給料がいい。したがって10年20年住み込んで、帰る時は稼いだお金を持って帰って、ロンドン郊外に1億円の家を買って、残りのお金でゆつくりと暮らすというライフスタイルなんです。だから、日本のシステムと、欧米人たちの考え方と、現地への入り方が違うんです。そういうのを経験すると、今の

も就職が難しいという時代になったのだから、海外に行つてあらゆるチャンスを掴む。場合によっては永住するくらいの勇氣を持つて欲しいと思います。

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

なくても国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

日本若くは日本人はパソコンや携帯電話でチョコチョコやっているよりも、語学と海外常識をもっと勉強して、どんどん海外に行かないと。日本企業も海外派遣をしていますけど、若い人は命令だから仕方がないというのがほとんどです。でも、喜んで行くようになって欲しい。それには日本の政府や企業も海外勤務者の給料に少し色をつけるという程度でなく、例えばイギリスでは、海外に住み込む人の子供はロンドンの寄宿舎に入れる。夏休みが始まると航空会社が子供たちを集めて親の海外勤務地に送る。夏休みが終わると、また飛行機が各地を回つて子供たちをロンドンに連れて帰る。イギリスでは、国を挙げて海外勤務者の家族を応援しているんです。日本では子供の教育があり、奥さんもあまり行きたがらないということ、海外に行つて住み込むということが非常に難しい。今のうちに、日本も失業率が高くなって、大学は出て

あとは、日本の政治家たちにも言えますが、チャーチルの「第二次大戦回顧録」とか、ちゃんとした本を読んで、あの時、イギリスはどう考えていたのかとか、どう対処したのかを勉強しないと。中国でもアメリカでもどう考えているのかと、そういうことをもっと真剣に考えて欲しいです。あまりに、日本人が小さなことにチマチマし過ぎて、このままだと先行きが不安です。だから寂しいですよ。こんな国、こんな国民のために、我々の友達がみんな特攻隊とかで死んでいったのかつて。恋も結婚もしないで、死んだんですから。それが一番、残念なことなんです。だから、こんなことを言うのは失礼かもしれませんが、顕彰とか慰霊祭とか、特攻とかに興味を持つのもいいけれど、それは過去のことであつて、むしろ、若い人たちは自分の将来のため、これからは必要ないかと思えます。

岡本…目に見えない力で、何か日本はおかしくなっている感じがしますね。だから、昔のこともいいけど、未来への夢みたいなものをみんな持つてほしいですね……。別に皆さんの活動にケチをつけているわけではありませんよ（笑）。今、戦争のことを考えて亡くなった人を顕彰してもらうことは有り難いことですからね。でも、松島でも皆さんのお金で碑を建てましたけど、世話人が亡くなつて行事をする人がいなくなつた。結局、松島の航空自衛隊のOB会が、殉戦者の碑と一緒に並んでいるからということ、毎年お花を供えて下さっています。それで私たちも安心していきます。それから、鹿児島県の出水の方は、やはり世話人たちも年をとつて、今後どこまで続けられるかわかりませんが、鶴の名所ということ

に考えて欲しい。場合によっては、大学の研究所といった所から築き上げて、政治家や官僚がバカげたことをしないように、どこからか見ているぞと。厳しい目で見ているというムードを作つて欲しいです。今は政治も信頼できないし、学者も専門の細かいことをやるのもいいけど、もっと、今の日本はどこに問題があるということを出さとかね。何か、今の状況は物足りませんね。

田中…私たちの戦争体験を話すことはありますが、どこまで理解してもらえるのかと考えると、やっぱり、疑問に思いますよ。私たちの世代と子供の世

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

岡本…あの時代、10代、20台の若者がどんどん最前線に行つたんですが、少

なくとも国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

田中…私たちの戦争体験を話すことはありますが、どこまで理解してもらえるのかと考えると、やっぱり、疑問に思いますよ。私たちの世代と子供の世

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

岡本…あの時代、10代、20台の若者がどんどん最前線に行つたんですが、少

なくとも国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

田中…私たちの戦争体験を話すことはありますが、どこまで理解してもらえるのかと考えると、やっぱり、疑問に思いますよ。私たちの世代と子供の世

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

岡本…あの時代、10代、20台の若者がどんどん最前線に行つたんですが、少

なくとも国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

田中…私たちの戦争体験を話すことはありますが、どこまで理解してもらえるのかと考えると、やっぱり、疑問に思いますよ。私たちの世代と子供の世

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

岡本…あの時代、10代、20台の若者がどんどん最前線に行つたんですが、少

なくとも国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

田中…私たちの戦争体験を話すことはありますが、どこまで理解してもらえるのかと考えると、やっぱり、疑問に思いますよ。私たちの世代と子供の世

代ではまったく価値観が変わりましたからね……。

岡本…あの時代、10代、20台の若者がどんどん最前線に行つたんですが、少

なくとも国を思い、家族肉親を思うという気持ちは、純粹なものがありません。だから、亡くなった人たちもそういう気持ちを持って亡くなったと思います。戦争というのはあつてはいけな

岡本鐵郎氏関連写真



土浦空時代（後列左から3人目）



大竹海兵団時代



飛行服



海軍少尉



96式陸攻の機内にて



96式陸攻と一緒に

田中三郎氏関連写真①



武山海兵団時代 (2列目右から2人目)



96式陸攻と一緒に (中央 下を向いているのが田中さん。一緒に映った4人は全員戦死した)



土浦空時代



美保空時代



美保空時代



飛行服



飛行服

田中三郎氏関連写真②



出水基地へ進出直前の記念写真（後ろは一式陸攻）



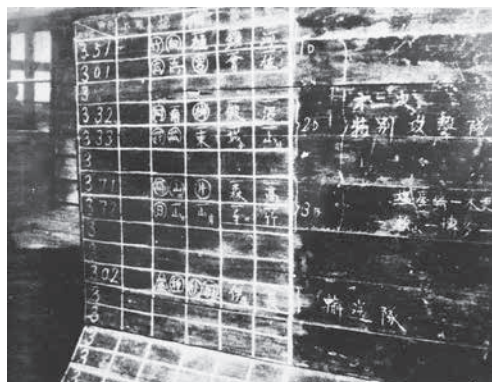
松島湾上空の96式陸攻



出水基地に進出直前



出水基地に進出直前



松島空第2次特別攻撃隊の搭乗割を記した黒板
(田中、岡本さんも同じように自分の名前が書かれた)



出水基地に進出直前



松島空の搭乗員たち（昭和20年3月）



出水基地にて

「幻の桜花四三乙型ターボジェット特攻機」(後編)

兵器システムの全容と作戦運用構想を探る

会員 川村 巖

四、桜花四三乙型特攻機射出基地の建設

1 基地配備構想と建設候補地の選定

桜花四三乙型特攻基地の配備構想が浮上し、具体的な準備に着手した時期や状況は明確ではないが、機密横領命令作第496号(20・5・22)により、鳥羽(6基地)、大井(6基地)、伊豆半島(8基地)、三浦半島(3基地)、房総南部(6基地)、房総東部(6基地)及び筑波(6基地)の計41箇所(以下「射出台」と呼ぶ)に基地の構築が下令されている。この時点で建設場所(地点)が確定していたのは、7月中旬から8月中旬までの完成という超特急工事が指令された三浦半島、伊豆半島及び房総南・東部の一部で、これらについては早々に着工されたものと考えられる。

この後、官房機密文書(細部不詳)による基地の増設・配備機数の増強指示や「基地建設場所を海岸付近から10

哩以上奥地とする」という配備方針の変更もあり、6月以降、再調査を含め本格的な建設候補地の選定が行われた。難航した建設候補地の選定

第725航空隊(後の桜花四三乙型訓練部隊)司令予定の鈴木正一中佐(兵58期)が、横須賀施設部、第一技術廠等の関係者とともに、各地の建設適地の選定に東奔西走し、調査報告第1回(伊豆方面、725空機密第3号、20・7・6)を手初めに7月下旬までに6回に及ぶ調査報告を提出している。候補地の選定に当たっては、

○道路からのアクセスが良好で、器材等の運搬道路の敷設が可能なこと

○射出軌条(射出台)と接続して至近場所に格納隧道の構築に適していること

等の一般的な立地要件に加えて、射出軌条(以下「射出台」と呼ぶ)の敷設場所について厳しい条件が求められる、報告からも選定が難航した様子が見え、最終的には、50基地以上、配備機数も段階的に1基地15機〜20機まで増強が計画されたと言われる。

2 射出基地の建設

基地の建設は、第20連合航空隊(20連空)に対して下令され、横須

賀施設部、第一技術廠及び航空廠が装備工事、器材の供給等に関して所要の協力をすることとされている。房総南・東部基地に関しては、水上・水中

特攻基地の場合と同様、20連空隷下の洲ノ空や香取空等が土木建築工事の主任担当部隊に指定され、練習生たちが多数動員されたものと見られる。

射出基地の建設に関しては、前編で紹介した「桜花四三乙型基地施設標準」で仕様が表示されているが、ここでは桜花特攻射出基地の「要」とも言うべき射出台の敷設に関して述べることにする。

「射線方向」の意味するもの
射出台の建設については次のような立地条件が付されている。

○射出台は水平に敷設し、射出点(滑走開始点)から射距離500mにつき20m以上の高度差が得られること。やむを得ない場合に限り、高度差10m以上、最大15度の上反角を設けることも可

○射出台の方位は、射出点から「射線方向」左右30度以内とする。

高度差については、射出直後の失速等による機体の高度低下を回復するための余裕と考えられるが、「射線方向」の規定は徒らに候補地の選定を困難にするものであり、人が操縦する航空機の射出台の方位の規定は理解に苦しむ

ところである。背後に第6項で述べる「作戦運用」が関係しているものと考えられる。

工事の防護、秘匿に対する配慮

「秘匿基地」の建設に当たって「施設標準」では空からの偵察及び工事の防護に関して厳しい規定が設けられ、細かい神経が配られている。

○施設等の完成状態だけでなく、特に射出台については工事中といえども防護網などで嚴重に隠蔽することとされている。

○工事用の道路、器材(トロッコ、車両等)、資材(鉄骨、木材)等の集積、置場等の隠蔽ほか

房総南部・下滝田基地の建設作業には、地域の住民や徴用工員、朝鮮人労働者等が多数動員されたという証言があるが、工事の防護上、射出台等の重要な場所の土木工事には洲ノ空等の隊員が充てられたものと推測される。

3 構築物跡に見る射出基地の輪郭

基地の建設状況を知ることのできる記録資料は僅少であるが、房総南部・下滝田及び房総東部・行川には、それらの構築物跡が残っている。(写真2〜5)

比叡山の訓練基地(後述)の構築物は終戦後、米軍に爆破されたが、この2箇所についてはその形跡は見られない。



写真2 射出台跡・房総南部下滝田基地



写真3 射出台のレール・房総南部下滝田基地

房総・下滝田について言えば、地方道から射出基地まで200m程度でアークセスは極めて良好であり、現在、射出台周辺は畑と化し、後方の山合いもジャングル同然の状態。基地全体の様子を知ることができないが、終戦当時を知る住民の証言によれば、至る所に隧道が掘られていたという。



写真4 旋回盤跡・房総東部行川基地

起伏の激しい山間の狭隘なスペースに、射出台を頂点として旋回盤の後方には桜花の格納隧道や燃料庫、兵員居住壕等が分散して構築され、土木建築工事は完成に近い状況にあったと推察される。

射出台を目の前にし、基地の輪郭を頭に描くとき、操縦席に就く搭乗員の胸中に去来する感懐や見送る兵員たちの息吹、鼓動が伝わってくるような錯覚にとらわれるのである。



写真5 桜花格納隧道跡・房総東部行川基地

五・桜花特攻機搭乗員の養成

1 桜花四三乙型訓練基地の建設

官房空機密第859号(航空本部20・5・16)により、第一技術廠、第23連合航空隊、舞鶴施設部に対して7月末までに速やかに完成させることを条件に、桜花四三乙型特攻機訓練基地の開設について次のような整備が指令されている。

- 滋賀海軍航空基地の飛行場及び訓練部隊用施設の整備
- 比叡山中堂(標高850m付近)に桜花四三乙型機用噴進射出軌条(射出台)及び付属施設の建設
- 器材(機体)運搬用として比叡山鉄道(ケーブルカー)施設の改

装等

訓練基地として滋賀航空基地及び比叡山鉄道が選定された理由は、滋賀基地(飛行場)が練習機の滑走着陸場として至便であることと、訓練を終えた練習機を山上の訓練場(射出台)まで運搬するのにケーブルカーの施設が利用できる利点からであろう。

当時、滋賀海軍航空隊の指揮を執っていた別府明朋少将(兵38期)は、戦後の回想記「特攻機桜花訓練所の急設」の中で、「比叡山鉄道(株)との交渉もスムーズにまとまり直ちに着工、奇しくも8月15日に竣工し、朝から相手側と権利譲渡手続等(不詳)に関する話し合いの最中に終戦の詔勅が下った」とある。

2 訓練部隊の編成、訓練準備

7月1日、横須賀武山基地で第725海軍航空隊(「725空」)が編成され、25日、部隊は比叡山の近くの滋賀海軍航空基地に移動し、40名近い搭乗員を含む約130名の隊員が訓練準備に着手したと言われる。

特攻要員として着任したA氏(18・10 甲飛13期予科練習生入隊)は、一昨年、館山を訪れた際「大村空での実用機課程を経て神ノ池の神雷部隊(721空)及び龍巻部隊(722空)で桜花一型練習機で模擬突進訓練を経

験したこともあるという。滋賀空着任時、飛行時間は250時間程度で、新型機(桜花四三乙型)については全く知らされてなかった」と語っている。

桜花搭乗員に求められる必須技能

桜花四三乙型機搭乗員の操縦訓練シラバス(実施要綱、評価方法等の計画書)を知ることのできる文書、記録資料は皆無であるが、搭乗員に求められることは、最終的に「目標への確実な突進」ということに尽きるであろう。しかし、それ以前に桜花四三乙型が「噴進射出装置併用による短い射出台からの発進」というところに、搭乗員にとって最初で最大の難関があると考える。

「桜花四三乙型計画要求書(発布時期等不詳)」の要求性能には、「射出速度(対気速度) 44m/秒で火薬ロケット(注)併用で射出した場合、機体の落下量ゼロであること」とされている。(注:桜花四三乙型機の胴体底部に装着される緊急離脱用火薬噴射ロケットを指すものと思われる)

このことは、エンジン出力コントロール(操作量、タイミング)のいかんによって、射出直後の機体の高度低下、姿勢変化が多分に起こり得ることをも意味するものである。出力コントロールのタイミングは、いささかの遅れ・フライングも許されない微妙な

操作であり、頭部に800kg炸薬を装備した状態での発進の失敗はそのまま大惨事に結びつくことは必定である。この操作に習熟することが先ずは搭乗員に求められる必須技能と言えよう。

前編で保留した「複座型練習機の開発指示」は、以後の搭乗員の訓練環境(燃料事情、空襲等)を考慮し、操縦経験の極めて少ない搭乗員に対して、短期間でこの必須技能を修得させるための「窮余の一策」と言えよう。

六、「桜花四三乙型特攻」の作戦運用構想

桜花四三乙型特攻機をどのような場面としたのかについては、公式の記録文書は見当たらず深いヴェールに包まれている。「桜花特攻機射出基地施設標準」は基地の構築に関する仕様書であるが、この中の基地編成標準やこれまでに知り得た桜花四三型ウエボンシステムの特性、そして当時の訓練環境から推量される搭乗員の技量等から、桜花四三乙型特攻機の作戦運用を究める上での糸口を見出すことができるのではと考える。

1 桜花特攻部隊の編成、配備の特色

「射出基地施設標準」に示された射

出基地の編成標準や上級部隊等との通信装備に関する記述内容から、(図3)のような桜花特攻部隊の編成、指揮の全体像を描くことができる。

桜花特攻部隊の作戦運用の基本

鳥羽から大井(静岡)、伊豆・三浦・房総の各半島及び筑波にかけて構築が計画された50箇所以上の射出基地(候補地)について、地名を頼りに基地の分布をマクロ的に見ると、それぞれ比較的狭い地域にまとまった「集落」を形成していることが分かる。一部の基地跡が残っている房総南部及び東部の基地(候補地を含む)について精査すると、それぞれ4~5キロ四方の狭い範囲に基地が配置されている。このことは、鳥羽から筑波にかけて7つの基地群が編成され、空襲等による被害局限のため基地を分散する一方で、特定の海域に兵力を指向した基地群を重点的に配備したものと見ることができよう。また、桜花四三乙型特攻機が、戦況

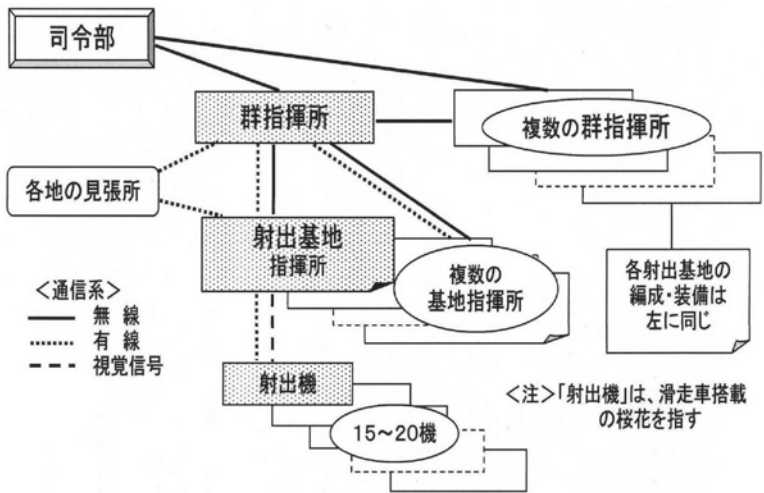


図3 桜花特攻部隊の編成体系

に於いて兵力を機動的に集中・展開させるという機能を備えたものではないことを考え合わせた場合、桜花特攻部隊の作戦運用の考え方の基本は、以下に要約できよう。

※複数の射出基地からなる各群は、特定の海域の防衛を担当する固定配備部隊であり、それぞれが作戦担当海

域(守備範囲)を指定されていた。

※作戦指揮は、第一義的には上級司令部からの指令を基本とするが、各群指揮所が沿岸各所に設けられた特設見張所(警備戦隊)や防備衛所(防備戦隊)と有線(情報ネット)で直結されていることと、本土決戦における指揮の分断の事態を考えた場合、群指揮所独自の判断による作戦指揮(出撃下令等)も考慮されていたと考えられる。

2 「桜花特攻」の致命的な短所・弱点

桜花四三乙型機の運動・戦闘能力、器材の信頼性及び搭乗員の技量は、桜花特攻の成否を左右する極めて重要な要素であり、作戦運用を考える上で不可分の要素でもある。以下、個々にについて簡略に述べる。

桜花四三型機の運動性能、戦闘能力

○桜花一型をベースに設計された機体であり、空力構造、操縦翼等の面でも高度なマヌーバー(運動)はできない。

○兵装は頭部の800kg炸薬のみであり、敵戦闘機に対する迎撃、空中戦闘はもとより機敏な回避運動も期待できない。

○航法機器の点でも夜間、霧中航法等は不可能

器材(原動機)の信頼性

○桜花のターボジェットエンジンは、開発実験・生産環境等からも品質、信頼性の点で大きな不安要素を抱えている。

○仮に早い時期に実用化が決定されたにせよ、実用場面での初期故障の発生や相当の性能のバラツキが出るこ

搭乗員の技量

○当時の訓練環境から桜花搭乗員の技量不足は致命的

○基地に配員後の操縦訓練は不可能、技量の維持・練度の向上は望み得ない。

米戦闘機との会敵公算
以上の短所、弱点はレーダーによる捕捉、戦闘機からの攻撃の誘因でもある。

3 「作戦運用構想」の総括

ネ20エンジンを「当時の技術の到達点(限界)」と評した技術者がいる。

技術とは、当時の開発環境、材料事情等すべてを包含したものであろう。エンジンに限らず前項であげた技術、教育訓練に関わる短所・弱点を、短時間で改善、解決することは諸般の事情から到底不可能であろう。

前(1)項で仮に桜花特攻部隊の「構え」が整えられたとしても、この状態

での特攻出撃は桜花一型の悲劇を繰り返すことにはかならない。

桜花の戦訓に応え、「犠牲を少なく、確実な戦果を期する」上で、「構え」に加えて作戦運用場面での「戦術・戦法」が練られ、具体策が講じられていた筈であり、そう確信したい。保留してきた施設標準の中の射出台の「射線方向」こそ、桜花四三乙型特攻の短所・弱点をカバーし、「確実な戦果を上げる」ために練られ、編み出された戦術・戦法の集約であると言えよう。

〈桜花特攻の作戦運用構想(まとめ)〉

前(1)項の「桜花特攻部隊(基地群)の編成」をベースとして、桜花特攻の戦術・戦法を中心に「作戦運用構想」について、補説を加えて以下のよう

◎出撃範囲の局限

基地群の作戦担当海域は、基地(射出台)ごとに定められた扇形の出撃範囲(扇の角度と進出距離、ここでは仮に「出撃セクター」と呼ぶ)によって構成されていた。この出撃セクターこそ、射出台の「射線方向」を基線とするものであり、桜花の行動範囲を局限することにより、桜花特攻の「短所・弱点」をカバーし、「確実な戦果」を期したものであろう。「目標を待ち構え、好機を捉えて

攻撃する」ところに、沿岸各地の水陸・水中特攻基地に設けられた「魚雷射堡」と運用の共通点があるのかもしれない。

◎攻撃の重点、対象(目標)

前編・冒頭の「当面作戦計画要綱」の中の「敵船団の洋上撃破」よりも「輸送艦船、上陸用支援母艦等の単艦船攻撃、水際撃破」に重点を置いたものであろう。

◎出撃方式、搭乗員の役割

群指揮所が選別した目標に対する単機または少数機による出撃を基本として、搭乗員は指示された方位(針路)の保持と目標への突進に専念。施設標準では射出基地に「射出砲台」という名称が付されており、違和感、抵抗を覚える呼称であるが、桜花特攻の短所・弱点を戦術・戦法で補完し、「犠牲を少なく、確実な戦果を上げる」ための「当を得た」名称と言えるのかもしれない。

◎戦闘機から攻撃回避策

黎明・薄暮出撃、低空飛行接近を基本航法とし、状況に応じて陽動機(レーダー攪乱、欺瞞)の配置等

桜花特攻部隊の作戦担当海域(仮定)

現在、基地跡を確認できるのは房総南部・下滝田と房総東部・行川の2箇所、射出台跡は下滝田のみである。

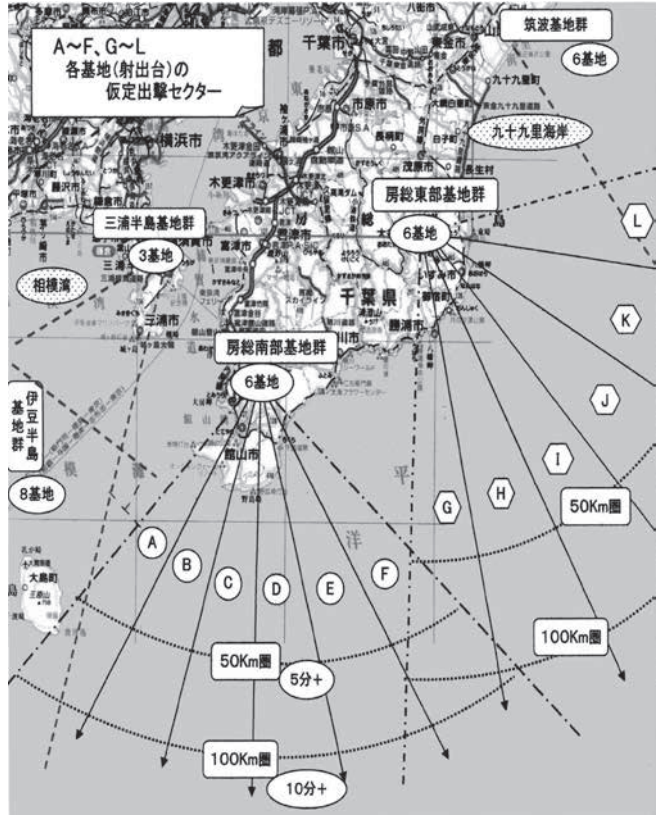


図4 桜花特攻部隊(房総基地群)の仮定作戦担当海域

因みにこの射出台の方位は170度で、方位線上、基地から20キロ付近の海岸に白浜・野島崎灯台がある。射出台の方位と「射線方向」は必ずしも一致するものではないが、これを射線方向と仮定し、各基地(射出台)の仮定出撃セクターを基にして、この2つの基地群の作戦担当海域を図示すると(図4)のようなイメージを描くことができる。

七. 余録

「大東亜戦争戦訓研究調査資料(S

理第二委員会)」
 終戦直後の混乱の中でまとめられ、時日を費やした研究調査とは言い難い面もあるが、資料中の桜花四三型に
 関係する指摘・所見から、当時の新兵器の開発や施策等決定経緯の一端をうかがい知ることができよう。
 ○「航空兵器の開発、生産について、作戦部から第一技術廠に対して直接、要求が出されたことの理不尽についての指摘(要旨)」

・ 桜花一型(あまり戦力に貢献できなかったもの)、桜花二型(技術的に未完成のもの)、桜花四三型及び橋花(技術的にまだ相当の疑点ある原動機を採用したもの)等の矢継早の開発要求が、航空本部(主務部の審査等)を経ることなく提出・決定され、技術行政に大きな混乱をきたした事例

○「海軍全般について事務処理の遅延、繁雑さに関する指摘(要旨)」

・ 桜花四三型基地装備訓練のような緊急を要する案件の持回中、一時(文書が)行方不明となり、発令を大幅に遅延させた事例

「次期航空軍備要領案(S20・6・18 航空本部総務部第一課長)」

航空軍備の主務担当部門の案として、次期施策の決定にどの程度採択されたかは分からないが、桜花四三型機の特攻兵器としての能力、用法等を知る上で希少な資料と史料する。

○特攻兵器・桜花四三乙型に関する評価等(要旨、一部捕捉)

・ 適合性・燃料事情に鑑み、一応の訓練を終えれば突進訓練を希望に実施する程度で可(兵器として採用の適合性)

・ 用法(運用上)極めて困難であるが対輸送船団攻撃に適

・ 判決(機動展開不可、基地固定配備のため)所要機数大、輸送船団攻撃の主体となし難く、他機種(開発中のキ115)の併用により対処し、生産については可能な限度まで継続

あとがき

「桜花四三乙型ターボジェット特攻機」、これは単に青写真ではなく、開発実験から生産準備、基地の建設、搭乗員の訓練準備等いずれも現実に着手されていた。

戦争末期、本土決戦に向けて多くの非合理的、非人道的な兵器や作戦が編み出され、実行に向けた準備が進められていた。終戦によってすべてが中止され、幻に終わったことはむしろ天佑とすべきであろう。

結果を評し、結果から非合理性や理不尽を指摘し、批判することはたやすい。何故このような発想、構想が生まれ、それが計画、実行に移されつつあったのか、当時の状況や関係した人々の思考過程、行動判断の根拠を、戦後の歴史観や価値観、現代の常識、感覚だけで理解し判断することは至難であり、

そこから公正な結論を導き出すことも、反省、教訓を見出すこともできないと思う。

拙稿「桜花四三乙型特攻」は、過ぎ去った「過去の出来事」として集成し、「戦記物」として紹介する意図を持たせたものではない。拙論の中から、このような発想が生まれ、実行に移されたような当時の状況や関係者の思考・行動判断の経過等を読み取り、現代に処する上での一助になればという願いを込めたものである。あわせて、拙論に対する忌憚のないご指摘やご教示をいただければ幸甚である。

結びに、過ぎし大戦において、殉国の至情にかられ、国のため、同胞のため悲壮な決意を抱いて戦場に赴き、散華され、日本の復興と平和の礎となられた英霊に謹んで哀悼の誠を捧げるとともに、日本人としてこの気持ち永遠に忘れるべきではないことを訴えたい。

〈参考文献・資料〉

- ・「旧海軍技術資料(社団法人生産技術協会編、1970・9)」
- ・戦史叢書 防衛省防衛研究所戦史部編纂「海軍軍備(2)」、「本土決戦準備・関東の防衛」ほか
- ・「特殊攻撃機橋花・ジェットエンジン」ネ20の技術検証(福澤和彦著、2006)」
- ・関係する旧海軍の文書、記録等については本文の中で注記

特攻コラム (その三)

○特攻隊員を悼む (その三)

前回、特攻隊の攻撃を阻んだ要素として、米艦隊のリーダー網を基幹とする組織的な防空網及び近接信管の開発成功を挙げ、その威力について述べた。その中で、「戦場の常」として、これ等を克服する方策を模索し、適用に成功した例があることとその事例を紹介することを約束したので、今回は、その事例について説明したい。

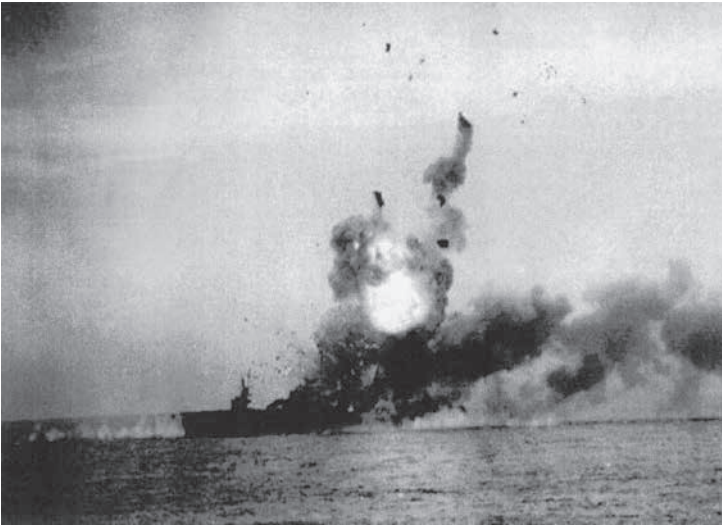
成功例の最も顕著なのは、関大尉率いる第一神風特攻隊敷島隊の戦果である。一般にこれは、「敵の予期せぬ自爆攻撃による大戦果」と理解されているが、それは浅薄な見方である。昭和19年10月18日、米軍のレイテ島上陸作戦開始を受けて、捷一号作戦が発動され、聯合艦隊は、米艦隊の集結するレイテ沖へ出撃する。これを掩護するため、23日には、在フィリピン海軍航空部隊の全力出撃が下命された。しかし、特攻隊以外の航空攻撃は、その時期低高度に雲層が多かったこと等もあり、殆ど戦果を挙げていない。米軍の艦隊防空に圧倒されたというべきである。そのような中で、敷島隊は、5機

の特攻機により、護衛空母セント・ローを撃沈、他にも3空母に損害を与えるという大戦果を挙げている。中でも新入の大黒上飛は、「技量的に自信がない」旨訴え、関大尉が、「俺にしっかり着いてこい。間違ひなく突入できる」と諭している事実があり、関大尉と大黒上飛は編隊で同時突入したものと考えてよい。したがって、敷島隊は全機が突入に成功したことになる。

ここで、関大尉の戦法を紹介する前に、「世界の撃墜王」、「ラバウルの魔王」と呼ばれた西沢広義飛曹長について、触れなければならない。西沢飛曹長は、他の海軍エースがいずれも小柄で俊敏な人が多い中、身長180cmを超える長身で、白髪・長髪的美男子であったと言われている。台南空の三羽がらす(他は坂井三郎、太田敏夫)と呼ばれ、敵基地ポートモレスビー上空、3機編隊3回の連続宙返りを行って、米・豪・英軍を睥睨した実話の持ち主である。撃墜数は150機と言われているが、同じ海軍ラバウル組の岩本徹三少尉(渾名は「零戦虎徹」と並ぶ。彼の偉業を称えた肖像画が、米国防省・スミソニアン博物館に飾られており、正に世界が認めるエース中のエースなのである。この西沢飛曹長が、敷島隊に合流、護衛戦闘機兼戦果確認機として行

動しており、海軍が組織を挙げて、特別攻撃隊に期待したことを物語っている。西沢の役割は大変な任務であり、襲いかかる迎撃機から攻撃機を守り、対空砲火の中を、攻撃機と行動を共にして戦果を確認し、再び敵戦闘機の追尾を振り切って生還しなければならぬという過酷さがある。この任務で、西沢はそれまで経験したことのない僚機(菅川飛長)を失い、かなりの被弾をして帰って来たという事実がある。西沢はセブ島飛行場に着陸、それまでに疲労困憊ぶりを見せていたそうであるが、正確な戦果報告を行っていた。そして明るく26日、傷付いた愛機を残し、輸送機乗客としてマバラカットへ移動中、真に残念ながら、米海軍F-6Fにより撃墜され、西沢広義は撃墜王としての短い、そして、偉大な人生に終止符を打ってしまったのである。

さて、関大尉始め敷島隊の執った戦法について述べる。敷島隊は、10月25日7時25分、マバラカット西飛行場を離陸、エンジン不調で1機が引き返し、爆装機5機、直掩4機でレイテ沖に出撃、米軍機の迎撃を突破して10時40分、タクロバン東方35マイルに空母群を発見する。西沢の報告、米空母側の記録によれば、以降関大尉は、散在する雲



米海軍護衛空母 セント・ロー 1944.10.25

を利用して接敵、超低空に降下し、近接信管の威力を減殺しつつ攻撃起点に占位する。充分距離を詰めて、今度は機関砲弾を避けるため、バレルロールと言われる比較的大きな円軌跡を描きながら最終降下姿勢に移行。10時49分、約30度の降下姿勢で、船体中央やや後方に2機、約15mの隊形で突入したのものである。この超低空からのバレルロール攻撃が、関行男が考えに考えた

結論であったろうと推察している。防空側から見ると、長距離砲射程では、超低空で侵入されたため、自慢の近接信管は海面反射波のため、早期に起爆し、効果を挙げられず空を切る形となる。機関砲射距離では、バレルロールにより常に上下方向と左右方向に砲を動かさねばならない状況で、照準が追いつかない状態にあったと思われる。さらに重要なのは、攻撃機は機関銃射距離で被弾面積を局限すること

が大変重要である。飛行機は当然のことながら、空気力学の産物であり、正面から見た断面積(被弾面積)は最も小さく、旋回・上昇効果に伴う姿勢変化は、必然的に腹又は背を見せることとなり、被弾面積が5倍6倍に膨れ上がる。といって被弾面積を気にする余り、直線的攻撃をやれば、防御側は機銃を動かすことなく、集中弾を浴びせることが出来る。バレルロールでは、常に目標に概ね正対し、被弾面積を局限しつつ、至近距離への占位が可能なの

である。勿論このためには、相当の技量が必要であるが、十分の事前研究で補うことも可能である。出撃前には入念な打ち合わせを行うのが常であり、戦法の細部について西沢も協議・了解していたのであろう。

写真は、被弾爆発中のセント・ローである。明らかに2発の爆発が殆ど同時に起きたことを物語っている。これは米軍側の記録によるものであるが、筆者はこの写真の直前、2機が、エンジン排煙を引きつつ直撃し、爆発が起きる直前の写真を見ている。クラーク在任のフイリピン人篤志家ディソン氏が保有し、自宅陳列コーナーに飾っている。それは全く無傷に見えるセント・ローであるが、前述のエンジン排煙がうつつらと、しかし明確に2本、平行線で突き刺さっている凄まじいもので、この写真の数秒前のものと思われる。関大尉の戦果については、セント・ローではなく、カリニンベイ又はキカトン・ベイ(何れも空母、損傷したものの沈没せず)であったとする、自称戦史家がいるが、筆者は、関と大黒とのやり取り、爆発寸前の写真から、セント・ローを直撃したのは、間違いなく関大尉と大黒上飛であり、疑問の余地はないと考えている。

このように、関大尉の攻撃は、今に

通用する見事な戦法であったにも拘わらず、何故以降の特別攻撃隊に生かせなかったのだろうか、という疑問が残る。一般には、米側が「特攻あるべし」として対応を改めたとか、日本側にベテラン操縦者が払底したからと言われているが、筆者は二つの大きな原因があると考えている。一つは、攻撃に参加し、一部始終を知り尽くした西沢上飛曹を失ったことである。恐らく彼は、戦法の細部を報告し、事後に反映させる役割と実力を持っていた唯一の存在であった。それを果たせず、貴重な体験を反映出来なかったのは、真に残念なことであった。二つ目は、報告を受けた上層部には、攻撃成果のみが独り歩きし、僅か4日の間に、マラリア患者のように体重を減らし、苦しみ、考え尽くした関大尉の戦法決定への労苦は伝わらなかつたことであろう。以降、陸海軍競って、特別攻撃隊を編成・投入するが、確たる戦法の検討・指導がな

ままに、犠牲を広げて行つたのは、誠に残念の極みであった。今少し司令部・上層部に現場重視、攻撃成功の原因追及の流れが欲しかったと考えている。

今回は、このような流れの中で、戦法に工夫を凝らし、成功したその他の例を紹介したい。

(ペンネーム・蒼蒼子)

「NHKクローズアップ現代」番組を観て

副理事長 藤田 幸生

昨年8月28日19時30分から海軍特攻隊員の遺書発見に関する番組が報道されました。1年が経とうとしています。

この番組は、NHK「特攻」取材班が、取材活動中、江田島にある海上自衛隊第1術科学校参考館において、海軍特攻隊戦没者の家族宛遺書を多数発見したことを基に制作された番組であります。その結果の所見を述べてみます。

現在、私が所属している「公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会」は、終戦直後から陸海軍特攻隊戦没者の「慰霊顕彰」を目的に活動してきた団体であります。その前身は、「特別攻撃隊慰霊顕彰会」という名前で、「財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」への改編を経て、現在に至っております。その活動は、GHQ占領当時から、特攻戦を遂行してきた関係者、及びこれを知る民間有志の方により自然発生的に湧き上がってきたものでした。当時は占領下で、監視の目も厳しく、それを掻い潜って、「何とかこの若者たちのこと・・・精神とその作戦の事実

だけは、是非とも後世に正しく伝えなければならぬ」との強い気持ちをもって、慰霊を続けたと聞いております。その海軍の活動の一つに、民間人の近江一郎氏による、私財を投げ打つての全国遺族巡拝等があったというのでした。

さて、その上でこの番組を観ての所見です。この番組を観て、「遺書の発見」という報道に大変驚きました。私の所見は、一言で言うなら、「意外、心外な内容で驚かされた」ということです。戦後、占領下でNHKから放送された「真相箱」という番組を思い出しました。これは、GHQの占領下において、その占領政策に沿って放送されたものと言われております。

終戦当時まだ幼くて、何がどうかもよく分からなかった関係者の方にインタビューして、コメントを引き出し、それらを編集して番組を制作しているように伺えました。その放送内容は、出演された専門家のゲストでさえ、NHKの意見に素直には同意できない場面があったことからしても、その意図さが伺えました。

近江一郎氏の写真を出して、「何か不明朗な機関の活動として、遺書を集めて回った」というようなイメージで放送されていました。この方は、純

粋なお気持ちで、全国のご遺族を一軒一軒弔問して回られたとお聴きしております。写真から受ける感じからも、そのことが信じられるところでした。長期にわたり、たった一人で全国の見知らぬ遺族を訪ね歩き、弔問、慰問されるのが、どれ程のご苦労か、実行した人にしか分からないでしょう。事前にご遺族の状況を勉強しておくことも必要で、経費も掛かったはずですが、それを見かねて、寺岡氏他関係者が種々情報を提供し、資金援助もされたと思います。

また、当時の飛行隊長といわれる高齢の方がNHKの質問に対し、あの戸惑いと苦渋に満ちたお顔で答えるお話の真意を、どのように理解すればいいのか、迷ってしまいました。

私が、放送内容に違和感があると申し上げるのは、このようなことです。

「マスコミ」は、国民に対する絶大な影響力を持っています。この「ペンの力」は、平時においては、「武力」にも勝るものです。国民の知る権利に基づいて、「報道の自由」「取材の自由」等の権利を与えられ、法により保護されています。NHKはまた、国民からの視聴料で支えられている公の立場です。事実を報道し、それを公平に判断したコメントを述べていくべきであり

ましよう。戦前、戦中のような過ちを、再び繰り返してはいけないと思うので

先人の誠意ある言動を理解できる感性と、謙虚な姿勢、事実を素直に、公平に直視できる勇氣と品格を持つて欲しいと切に希望し、期待したいと思

NHKで報道されたことは高く評価できますが、報道の内容は、用語が適切でなく、何よりも事実の受け取り方が、余りにも偏っているとしか思われませんでした。知らない人々の多くが、過った認識を持たれたことでしょう。極めて残念に思いました。

これからも、時空を超えた公平な価値観をもって、我が国の未来のために頑張つて欲しいと願つて止みません。

【沖縄航空作戦関係資料】

○主要な航空戦の交戦兵力と損害

時 期	名 称	日本側兵力	日本側損害	連合軍兵力	連合軍損害
3.18～21	九州攻撃 に反撃	第5航空艦隊 と第6航空軍 約700機	173機喪失 (内特攻115)	機動部隊 4群	損傷空母6、駆逐艦1、 潜水艦1
3.23～31	沖縄空襲 に反撃	不明確	(特攻機54)	約1,000機	沈没駆逐艦1、損傷空母1、 戦艦1、他28
4.7	沖縄へ 海上特攻	戦艦1、軽巡1、 駆逐艦8	沈没戦艦1、軽 巡1、駆逐艦4	機動部隊4 約330機	不詳
4.6～7	菊水1号 作戦	394機 (特攻215)	178機 (特攻162)		沈没駆逐艦他4、損傷空母1、 戦艦1、他19
4.12	菊水2号	345機 (特攻103)	114機 (特攻 69)		沈没駆逐艦1、損傷戦艦2、 他11
4.16	菊水3号	415機 (特攻177)	127機 (特攻106)		沈没駆逐艦1、損傷空母1、 戦艦1、他4
4.22	菊水4号	271機 (特攻 70)	39機 (特攻 32)		沈没掃海艇1、損傷駆逐艦 他6
5.3	菊水5号	300機 (特攻136)	65機 (特攻 61)		沈没駆逐艦3、損傷軽巡他7
5.11	菊水6号	175機 (特攻 69)	53機 (特攻 50)		損傷空母1、駆逐艦2
5.24～25	菊水7号	361機 (特攻107)	41機 (特攻 32)		損傷駆逐艦7
5.27～28	菊水8号	208機 (特攻 51)	46機 (特攻 26)		沈没駆逐艦1、損傷駆逐艦 他5
6.3～7	菊水9号	245機 (特攻 22)	18機 (特攻 5)		損傷駆逐艦1
6.21～22	菊水10号	255機 (特攻 67)	53機 (特攻 28)		損傷水上母艦2、駆逐艦1
4.1～6.30	菊水作戦 以外の沖 縄航空戦	海軍機約6900 陸軍機約2000			沈没駆逐艦5、損傷空母8、 戦艦6、巡洋艦2、駆逐艦 71、他43

○沖縄作戦関係の特攻—未帰還機

作戦段階別	海 軍 機	陸軍 (第6航空軍)	同 (第8飛行師団)	合 計
慶良間上陸以前	119機	——	——	119機
～本島上陸以前	21機	——	32機	53機
菊水作戦開始前	40機	17機	35機	92機
4月6日～11日	226機	126機	33機	388機
4月12日～5月3日	303機	239機	47機	589機
～地上戦闘終末	258機	276機	74機	608機
7月～8月	52機	——	——	52機
合 計	1019機	661機	221機	1901機

「十一分隊」ラッパ隊について

会員 原 知崇

海軍の軍服を着用して、世田谷山観音寺の特攻観音堂御前でラッパ献奏をさせて頂いている一群を御覧になったことがありでしょうか。軍帽のペンネントに「土浦海軍航空隊」の文字があれば、それは私も「十一分隊」です。判りやすく「ラッパ隊」「海軍衛兵隊」と名乗っている事もあります。

その姿に驚かれる方もおありですし、自然の事と思われる方もおありですが、昨今のミリタリー熱の高まりの中で、私も同様かつての軍服を纏って活動しているグループも増え、他のグループと混同される事も多くなって参りました。この機会に紙面を頂戴して私どもの活動をご説明させて頂きたいと存じます。

私どものグループは軍服を着用する目的が娯楽や研究、また政治ではなく、あくまで「慰霊と顕彰」であること。無報酬で行うことを会是としています。

私どもの前身となる「甲飛喇叭隊」が、当時の全国甲飛会大西真明会長の指示によって、甲飛十四期橋本四郎を隊長とし、海軍将兵ならびに予科練出

身者の慰霊顕彰のため予科練出身者をして正式に結成されたのは昭和58年の事でした。それまでも海軍関係慰霊祭においてはラッパの献奏が行われていましたが、甲飛喇叭隊の創設以降は海軍関係慰霊祭および戦友会でのラッパ献奏、儀仗隊派遣にとどまらず、海軍における正式なラッパ譜とラッパの保存、礼式の研究と資料の整備が積極的に行われました。

橋本四郎はやがて、高齢化により甲飛喇叭隊の火が消えることを危惧し、慰霊顕彰を引き継がせるために二つのグループを創設しました。一つは四国の榎本神社での献奏のための儀仗隊、もう一つは甲飛喇叭隊そのものを引き継ぐためのグループです。どちらも戦後生まれの若い志願者に対して、海軍の教範を用いて定期的な教練及び座学を行いました。

後者が私でも、平成18年、橋本四郎の没とともに、甲飛喇叭隊から戦後生まれの者が巢立つ形で「十一分隊」が設立され、以後はそれまでの甲飛喇叭隊と並立共存して重なり合いつつ、甲飛喇叭隊の精神を引き継ぐグループとして活動させて頂いております。

私が甲飛の諸先輩と関わり、この活動に入るようになってからは15年、さらに十一分隊の形となってからは7年

間の月日が流れました。

慰霊祭において、御英霊が活躍された当時の軍装を再現し儀仗を行う姿は欧米では地域社会によく根付いており、同様のグループが各地に存在しておりますが、日本では奇異の目で見られる事もあり、最初は「若い者がおかしい事をして」と、お叱りを受ける事もありましたが、やがて皆様からの過分なご信頼を頂けるようになり、国の内外に関わらず海軍関係の慰霊祭や御法要、戦友会、ご葬儀にお声をかけて頂いて、ラッパ献奏のお手伝いをして参りました。その数は百数十回を数えております。

陸軍の慰霊祭にも対応して欲しい、というお声を従来より頂戴しておりますが、平成25年に入りましてからは、慰霊に陸も海も分け隔てをする必要は無用という考えから、現在は陸軍式についてもお手伝いさせて頂いております。

陸軍式、海軍式、ともに御英霊のご活躍された時代や状況にあわせ、服装のみならずラッパそのもの、礼式、ラッパ操式、曲目、ラッパ譜等について細かい調整を行っています。

先代の代表である橋本四郎はまさに海軍の慰霊と顕彰、海軍の姿形の保存

に戦後人生を捧げた人物でした。

私どもは多くの教えを受けましたが、その中で私たちが行動の指針としておりますことは、慰霊と顕彰には亡くなった方のためのもので、「生きていての方のためのもので」と、「生き事です」。

亡くなった方への慰霊顕彰とは「忘れない事」。かつて国家が軍人と約束した通り、戦死者への慰霊を、日本民族が絶やすことがあってはならない、その業績と事実を、継続して繰り返して後世に伝えて行かなければならない、ということと考えております。

生きている方への慰霊顕彰はその姿形をもって、見る方に往時と故人を偲ぶ架け橋となることです。そのためは、「魂が無い、見せかけのものであつてはならない」こと、「かつての軍隊がやつたことはやる。やらないことはやらない。」事が大事とっております。

また、海軍軍人ではない私たちが海軍の軍服を着用するという事については、極めて重く考えております。

その形については「神仏の前だからこそ、嘘は許されない。人間には言い訳が出来るが、神仏に対しては言い訳が出来ない」ことから、服装と行動については必ず月1回以上の定期的な教練を行い、間違いが無いよう徹底して

高橋 房之	二	高梨 久義	千葉県	東 裕一
今井 敏夫	二	佐藤 孝一	東京都	杉浦 重行
齋藤 正夫	二	財津 甚吾	東京都	池田壽々子
坂本 康子	二	三河内健作	長野県	山崎恵一郎
山口 宗敏	二	山口 二郎	大阪府	倉科 力士
氏木 武	二	寺澤 英俊	和歌山県	榎木 夏樹
小原真知子	二	小松 嶺生	和歌山県	小松 雅也
小松健太郎	二	小島 啓三		野村 信行
松永 太	二	松尾 知男		
上原 富次	二	須田 里吉		
水野 清	二	清水 典郎	北海道	橋爪 覚次
石井 敏子	二	千田洋之助	青森県	信平 勝雄
川田久四郎	二	大塚 喜衛	栃木県	浅野 満祥
谷垣 尚	二	中江 仁	埼玉県	高橋晃太郎
長尾 教正	二	田鍋 守	埼玉県	橋本 健六
徳田 裕	二	板垣 正	千葉県	栗田 孝二
布廣 鉄夫	二	武藤 一彦	東京都	長谷 金吾
茂木 昌三	一	原田 行平	東京都	武田 慶司
光安 良一	一	荒井 和彦	神奈川県	西村 友雄
市村 俊夫	一	小林 節男	神奈川県	岩下 邦雄
松下 太郎	一	上畑 幸晴	岡庭 清一	岡庭 清一
杉浦 喜義	一	片岡 薫	静岡県	石野 博
峰守 貴雄	一	野俣 明	滋賀県	平居新市郎
國吉 實	一		京都府	仁熊 栄次
			大阪府	宮崎喜一郎
			兵庫県	上原 俊裕
			福岡県	岡部 順榮
			長崎県	松尾 茂雄
			熊本県	甲斐 恒喜
			鹿児島県	畠中 嘉見

新入会員名簿(敬称略)

(平成25年7月1日～9月30日)

栃木県 菊地 英宏
埼玉県 奥村侑生市
埼玉県 吉村 新

会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉養会が全国組織化
昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様
二代会長 瀬島 龍三 氏

平成5年11月財団法人認可
三代会長 山本 卓眞 氏

平成23年1月公益財団法人認定
現理事長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業
・特攻隊戦没者の慰霊顕彰
・広報誌等の発行
・講演会等の開催その他

○年会費
・一般会員 3000円
・学生会員 1000円
〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4596

ご投稿についてのお願ひ

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願ひします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願ひします。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません。必要の場合、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内 公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4596